

# ふるさと資源化の新展開

New Development of Hometown Recycling

山下裕作

YAMASHITA Yusaku

はじめに

①日本文化と民俗文化

②限界集落論と農村の実態

③文化資源化の新たな展開

おわりに

## 【論文要旨】

現在民俗学においては「文化の資源化」、「ふるさとの資源化」について盛んに議論されている。そこでは主に行政主導の地域振興事業や文化事業への批判的議論が主流をしめ、民俗学の「本質主義」的側面がそうした行政の事業施策に寄与したのだという学への批判が展開される。しかし、これらの議論は、地域の生活者が抱える卑近で切実な問題から目を背けたまま行われているように見える。本稿は、農村が直面する大きな問題として「限界集落」の問題を取り上げ、民俗文化的知見を活かしながらその解決を図る現場の実践を、鳥根県大田市大代町、新潟県十日町市松代町の二つの事例から分析する。従来の議論が官製の資源化に対する批判に留まっているのに対し、資源化の過程を見ながら、その新しい意味を問い直す試みである。そのうえで、民俗学が提起しうる健全な資源化の方法論の構築を企て、岩手県下閉伊郡岩泉町の現場で実践した試みの顛末を紹介する。いずれも大きな課題であり、未だ検討途上の域を出ない中途半端な検討ではあるが、現在のやや一方的な「資源化」批判の議論に一石を投じることとなれば幸いである。

【キーワード】 水田、ふるさと、資源化、限界集落、民俗学

## はじめに 一横柄なる自覚一

2008年の春、とある民俗学のシンポジウムに於いて、パネラーの報告後、聴衆の一人が発言された。<sup>(1)</sup>

「民俗学の皆さんは、この日本でノスタルジーを構築し続け、煽ってきたことを、本当に自覚されているのでしょうか。その罪の意識があるようには、とても見えない。」

おおよそこのような内容であった。洋行し文化人類学を修められた研究者の方である。

発言の真意を未だつかめずにいるが、このシンポジウム自体が、これまでの日本民俗学の有り様を批判し、ドイツやアメリカのフォークロアに倣えとする内容であった。その雰囲気流され、思わず口をついて出てしまった発言であろうかと思う。

このシンポジウムには一種独特の雰囲気が確かにあった。内容そのものは、普段あまり接することのない欧米フォークロアの動向を紹介し、そこから日本民俗学の新たな方向性を見出そうとするもので、大変に意味があるものだった。しかし、その場にある聴衆の観念を、パネラーの思う方向へ導こうとする一種の焦りがかいま見えるものでもあった。

先の文化人類学者の発言も、そうした強い問題意識のもと発せられたのだろう。しかし、私にはそうした「自覚」なるものが、どうしても持てないでいる。

パネラーや発言者の問題意識は良くわかる。それが極めて先鋭化しているということも。それは、いつまでも柳田国男に拘泥することなく、民俗の新たな事象を追っていき、現代を見据えていくとするものであり、そこには必ずや有意な芽があるだろう。しかしながら、そうした「自覚」を持つということが、なにかしら横柄なことのよう感じられてならないのである。

何故、横柄と感じられるのであろう。そして何故、それを忌避しようとするのであろう。横柄なら横柄で構わないのかも知れない。しかし、どこかでひどく「申し訳ない」と感じてしまう。誰に対してなのか。月並みではあるが、「ノスタルジー」や、それとほぼ同義なのであろう「ふるさと」等々、様々な資源を利用してでも、農村現地で生き続けようとしている生活者に対してである。では、何故「申し訳ない」のであろうか。それは生活者の生き続けようとする努力を前にして、研究者だから自分だけが分かっている、というような「のりしろ」的で、評論的な立ち位置で揶揄していることになりはしないか、という危惧からくるのだろう。

端的に言うと、その研究者としての「自覚」なるものは、対象の实在から遊離しているばかりか、その实在の持つ可能性を阻害する構造そのものにもなりかねないように思われてしまうのである。

そうであるならば、もしかしたら、この学問領域で言われる「ノスタルジー」や「ふるさと資源化」というものは、現実と背理した学問の自己満足的な言説になりさがっているのかもしれない。

本稿では「ふるさと資源化」の新たな局面を、農村現場の活動から見出し、民俗学がその現実と、現実が抱える問題点の解決に如何に寄与するか、拙いながらも考察するものである。

## ①……………日本文化と民俗文化

先に、文化人類学者による日本民俗学へ反省を促す発言を引用したが、同様の提起はまた他の文化人類学者からも出されている。

中西裕二は「複数の民俗論、そして複数の日本論へ」と題する論考において、「日本民俗学という学に、問題や矛盾が内包されている」とする。しかし、筆者はこの中西氏の論考そのものに多くの問題や矛盾を感じるのである。<sup>(2)</sup>

中西氏は「日本民俗学者は、古俗を変容させた阻害要因として歴史をネガティブに捉える傾向にあり、近代という時代はその典型であるといえる。しかし、近代以前にも、時代や政策により民俗行事は明らかに変容している。だが日本民俗学で重要な「民俗」とは、超歴史的な観念や行為群であり、変容せざるものなのである」<sup>(3)</sup>とする。これは批判部分においてはあまりに一方的で、指摘部分についてはあまりに陳腐なのではないか。今更言うべくもないと思うが、坪井洋文は「民俗とは異質の文化との接触による衝撃によって起きた自己認識の連続過程」と規定している。<sup>(4)</sup>また、農村生活文化のアカルチュレーション（文化変容）に関する調査・研究は、もう20年以上も前から実施されている。<sup>(5)</sup>さらに、「文化財という価値・意味付与が日本民俗学という近代思想の一領域のみに基づき行われ、結果として文化財指定に伴う諸観念が利用という名目で流通し、そして「日本文化」と民俗文化の連続性が自明視されることは、民俗文化の個別性を危険な状況に陥れかねない」とするのだが、少なくとも現状における「日本民俗学」の動向において、このような個別性を無視し、ナショナルな文化へと収斂させる傾向は微塵も感じられない。中西氏は将来起こるかも知れないパラダイムシフトによって日本民俗学が単なるイデオロギーに墮する可能性があるとするが、中西氏の民俗学＝牢固な本質主義という考え方こそ一種のイデオロギーなのではないだろうか。また、トマス・クーンの科学革命論（パラダイムシフト論）の前提には多元的な世界観がある。<sup>(7)</sup>いわゆる「通常科学」は一つではなく「世界を観る観方」の数だけあるのである。それゆえ、中西氏の言う「本質主義的な民俗学」が時代の主流でなくなったとしても、それはひとつの「通常科学」として潜在するのであって、根拠がないという意味での「イデオロギーそのものでしかなくなる」わけではない。いや、逆に言えば「イデオロギー」は批判的に用いられる言葉では無いはずだ。かつての支配的イデオロギーは「マルクス主義」で、現在の支配的イデオロギーは「構造主義」である。<sup>(8)</sup>そして社会学や民俗学の一部では「構築主義」が喧伝されている。完全に正しい科学があり得ない以上、何れも言ってみれば「イデオロギーそのものでしかない」。しかし、一方で、「人文科学であれ自然科学であれ」とされるが、科学革命論を民俗学等の人文科学に当てはめるのには強い違和感を覚える。基本的にこのトマス・クーンの理論は「科学における進歩とは何か」、ということを問いにしているからだ。それが単線的な進歩ではなく、様々な「通常科学」のせめぎ合いのなかで生じる多くの断絶による進歩という議論のように見える。確かに自然科学は目に見える「進歩」をしているように体感できる。しかし、人文科学においては研究者自身が、それぞれの生きた時代の歴史性の中にある。そう考えたとき、「本質主義的」と一方的に批判される民俗学のイデオロギーにも深い意味があったのではないかと思われるのである。

筆者はかつて歴史学、それも中国周縁の近代史を専門としていた。その感覚から言えば、ほんの20年と少し前まで、学問における支配的なイデオロギーは発展段階論として立ち現れるマルクス主義にあったように思う。その根本的な揺らぎは、天安門事件やベルリンの壁の崩壊だった。それ

は学問の中だけではない、広い一般社会においても共産主義的な革命論に依拠するかどうかは別として、経済原理にばかり拘泥した発展的歴史観がまさに支配的なイデオロギーであった。それは、農村においても例外ではない。むしろ農村はそうした発展的歴史観の深刻な犠牲者であったと言っても良い。筆者が言っても説得力はあるまい。今も現場で農業を続けながら作家を続けている山下惣一の言を借りよう。

「私の観察では昭和一ケタ以上の世代がそれにあたる。家のため村のためという意識がかなり強い。私たち昭和二ケタ以降になると違ってくる。明らかに戦後教育のせいだが、伝統的な農村特有の慣習、風俗等は「因習」として打倒の対象であった。とりわけ私たちの青春時代の1960年代、すなわちあの昭和30年代の「農村の近代化」とは、極論すればすべての伝統的・農村的なものの否定と新しい西欧的、工業的、都市的なものの導入であったといつてよい。

だから台所改善で卓袱台が駆逐されてテーブルと椅子に変わり、パンや牛乳やハムが食卓に並び、村の盆踊りは伝統の「口説き」からレコードをがらがん鳴らして明るい「東京五輪音頭」<sup>(9)</sup>に変わったのだ。私たちはその先頭を走った世代だった。」

「近代国家はその初発においてむき出しの権力であり、異質なものに対する支配であった<sup>(10)</sup>」という。戦後日本がその「近代国家」に相当するかどうかは分からないが、産業化による復興を国是とした戦後日本国は、産業化・都市化の文脈での近代化を、農村に対し一方的に推し進めてきた。その背景にあるもの、それが現代と現代に直接つらなる未来に、過去のすべてが集約されてしまう人間主義的進歩史観であった<sup>(11)</sup>。これこそが「ナショナル」な歴史・文化として、農村に住まう生活者の上に暴君として君臨していたのである。

戦前・戦中に於いても、そうした農村に対する国策としての一方的圧力は存在していた。それに早くから実務的に対抗してきたのは、柳田国男、早川孝太郎ら初期民俗学者たちである<sup>(12)</sup>。その圧力の背後には、大日本帝国の正統性と輝かしい未来を担保した皇国史観があったのだろう。

戦後、皇国史観そのものは否定されたが、かわりにマルクスやロストウらの、寄って立つ理想こそ異なるが、進歩史観そのものである発展段階論が展開され、実際の産業界、労働界にまで具体的な影響を及ぼしてははずである。その傍らで、農村は「農民層分解論」や「村の解体論」等に見られるように、第二次産業や都市の発展に伴う消滅か、「西欧的、工業的、都市的」な近代化、という将来像を押しつけられてはいなかったか。この背後にあるような人間主義的進歩史観と、それに基づく農村への無軌道な圧力に、民俗学は対峙し対抗しようとしていたのではないだろうか。その結果こそ民俗学が持つ「本質主義」と批判的に揶揄される部分であるように思われる。

即ち、短兵急に産業化へと突き進むことが日本の歴史とする進歩史観に対し、民俗学者それぞれが寂れゆく農村において調べ上げたことを、日本文化の基層・本質と提起し、対抗しようとしたのである。中西氏は「民俗文化は変化する歴史に対して変化しない基層を意味し、それは超歴史の実体<sup>(13)</sup>ということになる」と言うが、これは一種の戦略であって、その当時の時代状況の中で、アンチテーゼとして発せられた言説であろう。

また、「日本という国民国家の枠内で想定される文化概念に収斂させ、ある種の本質を仮定する作業は、実は現場の民俗調査の現場においてでさえほとんど必要としない。ナショナルな欲求のみ<sup>(14)</sup>が、それを単一的に解釈したがるといえる」というのは本当だろうか。先に見たとおり、戦後、い

や近代の農村は、一貫して因習旧弊にまみれた、近代日本のお荷物とされ、指導されるべき惨めな立場を押しつけられてきた。その一方で、民俗学者の多くは、調査の現場において、固有の知恵や技能で健全に生き続けようとする農村生活者の姿を目の当たりにしたであろう。その経験から、この自らが所属する国家、特に戦後に於いては国民主権の民主主義国家日本にとって、農村の民俗文化が守られるべき重要な本質であると主張しようとするのは、そう不自然なことではないし、罪の意識を持つべきものでもない、むしろ当時の時代状況下にあつては研究者として賢明な判断であつた。民俗学者は当時を生きる国民の多くを巻き込もうとしていた単線的で一元的である「ナショナル」な人間主義的進歩史観に対し、地方の農村に実在する「複数の民俗文化」の重奏からなる「複数の日本論」を提起した。そして進歩史観にかいま見える「ナショナルな欲求」に異議を唱えようとしたのである。

## ②……………限界集落論と農村の実態

民俗学は近代日本における人間主義的進歩史観に対するアンチテーゼであつた。それは当時の時代状況において、「ナショナル」に、消滅か、さもなくば上からの指導に基づく近代化を義務付けられていた弱者（特に農村）の尊厳を高めようとする営為に繋がっていた。そうした中で権威をもたない尊厳に「本質」があると記述したことも多々あつただろう。しかし、それは「本質主義」などと揶揄されるべきことではない。幾多の問題が内包されているとはいえ、「無形民俗文化財」や「おまつり法」や「ふるさと文化再興事業」は、それぞれの時代における確実な前進である。まだまだ「前向きな」議論を行って、これら施策を健全な方向に導く努力は怠ってはいけませんが、これはむしろ功績と言うべきではないか。

現在の民俗学において、非常に問題であると感じるのは、上記諸施策に対する批判的議論に終始している一方で、そうした大枠の議論には無関心でいる方が大勢を占めているように見えることである。いずれにしても、本当に対峙するべきものに関する議論が疎かになっているように感じられてならない。

本当に対峙するべき対象は何か、それはやはり人間主義的進歩史観であろうかと思われる。魔女狩的にそうした進歩史観的なものを探りあてて、いちいち噛みつくような真似はさもしいが、今現在、世に蔓延し悪影響を及ぼしかねない進歩史観が、我々の目の前に存在している<sup>(15)</sup>と考える。それは「限界集落論」である。

福武直による著名な村落分類、東北日本同族型、西南日本講組型、というのは今更言うべくもなく問題の多い地域類型である。しかし、発表当時、この論に新規性があつたのはこれら地域類型に<sup>(16)</sup>動態の意味が付与されていたということである。即ち同族型村落は時代を経ると講組型村落へ移行し、さらに村落は変容発展する、という考え方である。限界集落論もこの福武の地域類型と同様な構造をもっている。限界集落論はそもそも統計を用いた単純きわまりない地域類型である。その諸<sup>(17)</sup>類型と類型指標を表1に整理した。

この表をご覧いただければおわかりのことだろう。この限界集落論の各指標は、人間は10年経てば10才年をとる、という極々あたりまえなことを背景として（よくマルコフモデルという本来は確率論の難しい議論に還元（酸化？）されるのであるが）、ひとつの時系列にそつた動態的性格



表1 集落状態の区分

類型名称	類型指標	内容
存続集落	55才未満人口比 50%以上	跡継ぎが確保されており、社会的共同生活の維持を次世代に受け継いで行ける状態
準限界集落	55才以上人口比 50%以上	現在は社会的共同生活を維持しているが、跡継ぎの確保が難しくなっており、限界集落の予備軍となっている状態
限界集落	65才以上人口比 50%以上	高齢化が進み、社会的共同生活の維持が困難な状態
消滅集落	人口・戸数がゼロ	かつて住民が存在したが、完全に無住の地となり、文字通り集落が消滅した状態

※[大野2008] p7より引用

を有している。この論理には、高度成長期（日本国がナショナルな進歩史観で邁進していた時代）の「村の解体論」、その具体的な現れとされた「過疎化論」、さらに「過疎化論」における時系列的意味合いを強化した「過疎・高齢化論」という前史的系譜がある。この「限界集落論」や、その前史は、農村生活の先行きを運命づけてしまう「構造」そのものである。それは人間主義的進歩史観が都市部という中心において衰微しつつある一方で、周縁としての農村に残存し、それがまたネガティブな時代的雰囲気によって助長され強化されたものである。そこには農業農村に関わる官学アカデミズムの専門家や研究者に問うべき責任が多くある。早川孝太郎の時代から、こうした者は農村を沈鬱で息苦しいものにしなければ気が済まなかったのである。<sup>(18)</sup>

しかしながら、この「限界集落」という言葉は、何も近年の発明物ではない。起源は不詳だが、この言葉を冠する書籍も既に1974年に公刊されている。山口源吾『高距限界集落』である。<sup>(19)</sup>

「高距限界集落」とは「高距居住限界地域の集落」のことである。具体的には標高1000m以上の高位置に立地する集落であり、耕境に近く、まさに人間の居住限界地を意味する。いわば現在言われる「限界集落」を超える過酷な条件不利地域であって、「1960年代の高度経済成長期に入ると、山村では著しい生産年齢人口の流出によって過疎現象が起こり、そのために村落共同体の機能が崩壊して廃村にまで至った所もあらわれたが、この現象はとくに高距集落において顕著である」と<sup>(20)</sup>あるように、過疎高齢化の影響が最も深刻であろうと予測された地域である。

近年は交通もさほど不便とは言えない純農村集落でさえ、やれ「限界集落」だ、「準限界集落」だと喧しいが、山口の「高距限界集落」の条件不利性は、「高距（高くて遠い）」という名が示すとおり、現在の限界集落をはるかに凌駕している。それら高距限界集落の現状はいかなるものになっているか、未だ検討途上であり、不十分なものに過ぎないが、中途的な結果を提示しよう。

表2は『高距限界集落』に記述のある90の集落の中で、書中で廃村とされた集落である。見ると確かに「過疎化」を原因とする廃村が29集落中8集落あるが、廃村集落の3割、記載集落全体の1割に満たない。7割以上を占める他の廃村集落は、ダムの建設による水没、道路や鉄道の敷設による交通集落の廃村、鉱山の閉山による鉱山集落の廃村等、近代化に伴う具体的な事由による廃村であって、高度経済成長がもたらした迂遠な理由（過疎高齢化）によるものではない。一方、『高距限界集落』において存続している集落について見てみよう。表3である。

ここでは2000年世界農林業センサス農業集落カードを用いて、2000年時点での集落状況を把握し、併記した。集落カードに記載が見られる集落が43、この内11の集落が5つのカードにまとめ

表2 『高距限界集落』廃村集落

県名	番号	書中地名	現行地名	元の集落特性	廃村の理由
群馬	1	元山(後に西山)	群馬鉄山。廃村。六合村入山元山	鉱山集落	輸入鉄増加による閉山
長野	2	奥三川(板小屋の改称)	長野県南佐久郡南相木村	三川の出作り集落	南相木村の移住奨励施策
	3	袖崎	長野県南佐久郡南牧村	交通集落	小海線開通
	4	国界	長野県南佐久郡南牧村	交通集落	小海線開通
	5	三軒屋	長野県南佐久郡南牧村	交通集落	記述無し
	6	鮫鱈	長野県下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	過疎化
	7	待沢	長野県下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	過疎化
	8	光沢	長野県下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	過疎化
	9	高原寺組	長野県下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	過疎化
	10	大花沢	長野県下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	過疎化
	11	大平	長野県飯田市大平	交通集落	中央西線・飯田線の全通
	12	角ヶ平	長野県松本市奈川	交通集落	奈川渡ダム建設による移転
	13	稗底	長野県諏訪郡富士見町広原	記述無し	気候、土地生産性の低さ
	14	西餅屋	長野県小県郡長和町和田峠	交通集落	鉄道開通
岐阜	15	牛首	廃村。岐阜県大野郡白川村牛首	農業集落	過疎化
	16	加須良	廃村。岐阜県大野郡白川村加須良	農業集落	過疎化
富山	17	有峯	富山県富山市有峰	兼業山小屋集落	記述無し
福井	18	中島(西谷村)	福井県大野市中島	林業集落	自然災害・真名川ダム建設
	19	本土(西谷村)	福井県大野市本戸	林業集落	笹生ダム・雲川ダム建設
	20	黒当戸(西谷村)	福井県大野市黒当戸	鉱山集落	中島・上下笹又の離村
	21	上笹又(西谷村)	福井県大野市上笹又	林業集落	自然災害・真名川ダム建設
	22	下笹又(西谷村)	福井県大野市下笹又	林業集落	自然災害・真名川ダム建設
	23	上秋生(西谷村)	福井県大野市上秋生	林業集落	笹生ダム・雲川ダム建設
	24	下秋生(西谷村)	福井県大野市下秋生	林業集落	笹生ダム・雲川ダム建設
	25	小沢(西谷村)	福井県大野市小沢	林業集落	笹生ダム・雲川ダム建設
	26	温見(西谷村)	福井県大野市温見	林業集落	自然災害(大豪雪)
	27	熊河(西谷村)	福井県大野市熊河	林業集落	自然災害(大豪雪)
	28	巢原(西谷村)	福井県大野市巢原	林業集落	中島・上下笹又の離村
新潟	29	吉ヶ平	新潟県三条市吉ヶ平	記述無し	過疎化

られているのでカードとしては37ある。その他15集落がセンサスの「調査対象外」となっており、1集落が廃村、「高距限界集落」に記載のない集落のカードに合併され分離が不可能な集落が一つある。調査対象外とは、人口があまりに少ないか、集落の産業に占める農業の割合が小さい、という理由により農業集落調査の対象から外された集落であると考えられる。

この「調査対象外」集落に関しての分析は後に行うことにして、先ず農業集落カードから、『高距限界集落』の近年の動向をみてみよう。先述したとおり、大変な条件不利地域であり、かなりの過疎高齢化の深化が予測されるところであるが、カード集落37の内、農家人口の高齢化率(65才以上人口比)が50%を超え、いわゆる「限界集落化」が懸念される集落は、岐阜県高山市高根町小日和田と長野県伊那市長谷浦、同県木曽郡王滝村滝越の3集落しかない。一方で総戸数が増えている集落(書中地名の網掛け部分)は、20も存在する。戸数減少している集落であっても戸数が半減しているような集落は3集落にとどまり、他は大体2～3割の減少に留まっているのである。全国の中山間地域の戸数減少率平均が未詳であるため、この数字の意味するところを明示できるわけではない。しかし、農業集落カードに記載のある高距限界集落を見る限り、激甚たる過疎高齢化が予想されるような過酷な条件下にある農村集落にしては、この1970年から30年間の過疎高齢化の進展はさほど深刻ではないように思える。なにしろ現時点で「限界集落化」が懸念される集落は三つしかないのである。

表3 『高距限界集落』存続集落

2000年農業センサス集落カード

県名	番号	書中地名	現行地名	元の集落特性	現存集落の特性・産業	総戸数	70 総戸数	総農家数	65才以上割合	カード地名
栃木	1	中宮祠	日光市中宮祠	観光休養集落	観光休養集落	調査対象外				
	2	湯元温泉	日光市湯元	観光休養集落	観光休養集落			7	32%	奥日光
群馬	3	小串(鉾山)	吾妻郡嬭恋村小串	鉾山集落	鉾業	21	21	10	19%	仁田沢
	4	吾妻(鉾山)	吾妻郡嬭恋村干俣	鉾山集落	鉾業					
	5	仙ノ入	吾妻郡嬭恋村仙ノ入	開拓集落	農業(商品作物)	48	42	31	28%	○
	6	中原	吾妻郡嬭恋村大笹中原開拓	開拓集落	農業(商品作物)	23	22	18	18%	○
	7	大平	吾妻郡嬭恋村大笹大平	開拓集落	農業(商品作物)	22	29	14	21%	○
	8	大笹	吾妻郡嬭恋村大笹	開拓集落	農業(商品作物)	376	218	113	25%	○
	9	石津(鉾山)	吾妻郡嬭恋村	鉾山集落	鉾業	42	37	14	33%	○
	10	白根(鉾山)	吾妻郡草津町	鉾山集落	鉾業	252	96	24	41%	前口
	11	草津温泉	吾妻郡草津町	温泉集落	観光	温泉街区「本白根」の一部				
	12	入山地区	吾妻郡六合村大字入山	木地屋集落	農林業	大字				
	13	熊倉	吾妻郡六合村入山熊倉	開拓集落	農業(商品作物)	調査対象外				
	14	田代原	群馬県吾妻郡六合村入山田代原	開拓集落	肥育牛, 山菜採集, 花インゲン	22	13	14	23%	○
山梨	15	黒森	北杜市須玉町小尾黒森	農業集落(牛馬の肥育・養蚕)	農林業(製炭)	32	43	19	47%	○
	16	金山	北杜市須玉町小尾金山	農業集落(馬の肥育が主)	観光	42	49	18	41%	東小尾
	17	増富ラジウム温泉	北杜市須玉町増富ラジウム鉾泉	温泉集落	観光					
	18	方伝	北杜市須玉町小尾方伝	開拓集落	農業(自給), 出稼ぎ	調査対象外				
	19	戸屋	北杜市須玉町小尾戸屋	開拓集落	農業(自給), 出稼ぎ	調査対象外				
	20	一の瀬	甲州市塩山一之瀬高橋	農業集落	林業	調査対象外				
	21	高橋	甲州市塩山一之瀬高橋	農業集落	林業	調査対象外				
	22	落合(高橋の枝村)	甲州市塩山一之瀬高橋	交通集落	林業	調査対象外				
	23	柳平	山梨市牧丘町柳平	開拓集落	酪農	調査対象外				
	24	念場原開拓地	北杜市高根町清里	開拓集落	農業(商品作物), 酪農	93	28	14	14%	下念場
長野	25	旧軽井沢	北佐久郡軽井沢町軽井沢	宿場集落	観光	86	24	15	30%	東念場
	26	峠町(軽井沢)	北佐久郡軽井沢町峠町	高距交通集落	観光	調査対象外				
	27	木次原	南佐久郡北相木村木次原	林業(専業製炭)集落	林業労務・季節製炭・農業	37	40	8	36%	白岩
	28	三川	南佐久郡南相木村三川	農業集落	農業	27	55	12	45%	○
	29	川端下	南佐久郡川上村川端下	林業集落	農業(商品作物)	62	46	33	18%	○
	30	梓山	南佐久郡川上村梓山	林業集落	農業(商品作物)	93	96	74	23%	○
	31	御所平	南佐久郡川上村御所平	林業集落	工業, 勤人	380	350	134	25%	○
	32	板橋	南佐久郡南牧村板橋	交通集落	記述無し	121	76	63	24%	○



	33	野辺山開拓地	南佐久郡南牧村野辺山	開拓集落	農業(商品作物)・畜産(乳牛・綿羊)	319	117	80	25%	野辺山
	34	浦	伊那市長谷浦	林業(製炭)集落	林業(製炭)	23	19	11	69%	上村
	35	北川	下伊那郡大鹿村北川	林業(木地屋)集落	林業(製炭)	19	37	14	47%	北入
	36	高坪	木曽郡木曽町開田高原西野	高距自給穀作農業集落	農業(自給)	23	29	13	38%	藤沢
	37	藤沢	木曽郡木曽町開田高原西野	高距自給穀作農業集落	農業(自給)					
	38	関谷	木曽郡木曽町開田高原西野	高距自給穀作農業集落	農業(自給)					
	39	黒沢	木曽郡木曽町三岳黒沢	信仰集落	観光	77	63	19	36%	小島・桑原
	40	滝越	木曽郡王滝村滝越	林業集落	林業	13	39	5	71%	滝越
	41	漆畑	木曽郡南木曽町吾妻漆畑	林業(木地屋)集落	林業	調査対象外				
	42	蓼科温泉	茅野市北山蓼科	湯治場	観光	220	198	93	32%	湯川
	43	中山開拓	茅野市蓼科湖	開拓集落	観光					
	44	池ノ平	北佐久郡立科町白樺湖	開拓集落	観光	18	21	18	34%	中尾
	45	峠(神祠峠)	松本市 祠峠	交通集落	角ヶ平の廃村による移転					
	46	番所	松本市安曇番所	大野川の出作り集落	農業(自給)	209	41	11	40%	番所下
						108	49	29	24%	番所上
	47	南原山開拓地	諏訪郡富士見町	開拓集落	農業(商品作物)	230	80	43	28%	南原山・富原
	48	強清水	諏訪市霧ヶ峰高原強清水	夏期のみの観光集落	観光(定住)	52	12	9	24%	霧ヶ峰
	49	霧ヶ峰農場	諏訪市霧ヶ峰	開拓集落	酪農					
	50	東餅屋	小県郡長和町和田峠	交通集落	記述無し	16	19	11	38%	男女倉
岐阜	51	日和田(小字)	高山市高根町日和田	高距自給穀作農業集落	農業(自給)	72	68	24	32%	○
	52	野麦	高山市高根町野麦	峠集落	肥育(肉牛)	22	26	9	27%	○
	53	小日和田	高山市高根町小日和田	高距自給穀作農業集落	農業(自給)	17	23	11	52%	○
	54	留之原	高山市高根町留之原	高距自給穀作農業集落	農業(商品作物), 酪農	26	30	18	47%	○
	55	平湯	高山市奥飛騨温泉郷平湯	温泉集落	観光	調査対象外				
	56	六廐	高山市荘川町六廐	戦後開拓村	農業(商品作物), 酪農	30	38	11	36%	○
	57	大窪	大野郡白川村大窪	農業集落	農業(自給)	調査対象外				
	58	馬狩	大野郡白川村馬狩	農業集落	農業(自給)	調査対象外				
	59	桂	南砺市桂	農業集落	記述無し	調査対象外				
富山										

※表頭、書中地名とは『高距限界集落』に記載されている地名。

※表頭、現行地名とは2000年時点(平成大合併以前)での地名。

※表頭、元の集落特性とは『高距限界集落』に記載される伝統的な集落特性。

※表頭、現存集落の特性・産業とは『高距限界集落』に記載される高度経済成長による変化を経た後の集落特性と集落主産業。

※表頭、総戸数とは『2000年世界農林水産業センサス集落カード』にある2000年時点での集落総戸数。

※表頭、70総戸数とは1970年の総戸数(2000年センサス集落カードより、以下同)。

※表頭、総農家数とは2000年の総農家数。

※表頭、65才以上割合とは2000年時点の高齢化率。

※表頭、カード地名とは集落カードに記載されている地名。書中地名と同じである場合には○で標記した。

※書中地名において網掛けされているのは、1970年から2000年にかけて総戸数が増加している地域。

表4 高距限界集落追跡調査途中経過

『高距限界集落』				『農業センサス集落カード』				
	集落総数	廃村集落	現存集落	センサス集落数	高齢化率		戸数	
					50%～	40%～	総30以下	農20以下
栃木県	2	0	2	1	0	0	1	1
群馬県	13	5	8	5	0	0	3	3
山梨県	10	0	10	4	0	2	0	4
長野県	39	14	25	19	2	3	5	11
岐阜県	10	2	8	5	1	1	2	4
富山県	2	1	1	0	0	0	0	0
福井県	11	11	0	0	0	0	0	0
新潟県	1	1	0	0	0	0	0	0
	88	34	54	34	3	6	11	23

※「センサス集落数」は農業センサス集落カードに記載があり、調査対象外ではない集落の数

※「高齢化率」は農家人口の高齢化率

※「総30以下」は総戸数30戸以下(20戸以下：栃木1・長野3・岐阜2。10戸以下：栃木1?)

※「農20以下」は農家戸数20戸以下(10戸以下：栃木1・長野3・岐阜1)

調査対象外集落においてはどうかであろうか。いわば集落カードに記載が無いということで廃村という事態も予想されるが、必ずしもそうではない。最新の情報をインターネット等を用いて入手し、整理すると表5のようになる。これらはみな現存する集落である。そして、集落名が網掛けになっている集落が「調査対象外」の集落である。これによれば、『高距限界集落』中に「廃村」の記述がある集落以外の「残存」集落は、そのほとんどが現在でも尚その土地で健全に息づいていることが分かる。さらに驚くべき事に、「廃村」と記述された集落のいくつかにおいて、出身者を中心とした交流会や、廃校となった出身小学校の再生運動など、集落そのものの復活とまでは行かないが、集落の「記憶」を現代に活かす活動が行われている(表6)。

本来、各集落の史的経緯をつぶさに明らかにしていくべきなのであるが、何分未だ検討途上である。しかし、表5中に見られるように、観光や特産品、そして都市農村交流事業等を行いながら存続し、これからも存続し続けようとしている集落は数多い。山口の『高距限界集落』が1974年の公刊ということを考えれば、これらの活動は、古くから様々な紆余曲折を伴いながら地域住民の手で実践されてきたことであるといえる。民俗学が文化の資源化をとにかく言い連ねる以前から、地域の生活者は、新たな時代の変化を受け、所与の環境を資源として巧みに利活用しながら、現在まで生き続けてきたのである。そして、ネガティブな人間主義的進歩史観である「限界集落論」をよそに、これからも生き続けるであろう。「廃村」とされた集落においてさえ、なにかしらの復活の動きが確実に芽生えつつある。こうしたことから見るに、「限界集落」という言葉の本来の意味は、人間が切り拓き、住み着いた限界地としてのフロンティアということであり、そこには人間の持つ卓越した知恵と技能が色濃く含意されている。そのフロンティアで様々な困難を乗り越えて生き続ける人間たちは、実践力に満ちた雄々しい生活者なのである。そして、現象として立ち現れる過疎・高齢化、村の荒廃は、そうした生活者の実践によって必ずや解決できるのであり、その実践の主要な部分は、自己を内包した環境の資源化そのものなのである。

表5 インターネット検索による現在の集落資源(存続集落)

県名	番号	集落名	現行地名	元の集落特性	内容	実施中心団体	実施団体の構成	開始年	イベント内容
栃木	1	中宮祠	栃木県日光市中宮祠	観光休養集落	観光(日光二荒山神社, 旅館・飲食店など)	日光観光協会	社団法人	不明	男体山登拝祭奉賛人行行列・深山踊り(7/31~8/1)・初詣参道提灯飾り(12/31~1/3)
	2	湯元温泉	栃木県日光市湯元	観光休養集落	観光(温泉, スキー場, 旅館・飲食店など)	日光観光協会／湯元温泉旅館協同組合	社団法人／地域住民	不明	湯元温泉ファミリースキー大会
群馬	5	仙ノ入	群馬県吾妻郡嬭恋村仙ノ入	開拓集落	特産品(高原野菜, 仙之入物産センター〈農産物販売〉)	(嬭恋村観光協会)	地域住民	不明	—
	7	大平	群馬県吾妻郡嬭恋村大笹大平	開拓集落	観光(ゴルフ場「バルコール嬭恋ゴルフコース」)	不明	不明	(平成4年か)	冬期間休業
	8	大笹	群馬県吾妻郡嬭恋村大笹	開拓集落	観光(ゴルフ場)／特産品(農産物直売所)	不明／(嬭恋村観光協会)	不明／地域住民	(平成4年か)／不明	—
	10	白根(鉾山)	群馬県吾妻郡草津町	鉾山集落	廃村。観光(静可山スキー場〈2002年廃業〉)	—	—	—	—
	11	草津温泉	群馬県吾妻郡草津町	温泉集落	観光(温泉, ハイキングコース, スキー場, スポーツ施設など)	(草津温泉観光協会)	—	不明	—
	12	入山地区	群馬県吾妻郡六合村大字入山	木地屋集落	特産品(菅細工体験施設「ねどふみの里」・木工品・そば・花インゲン大福)	ねどふみの里保存会・個人経営	地域住民	平成15(2003)年	体験
山梨	15	黒森	山梨県北杜市須玉町小尾黒森	農業集落(牛馬の肥育・養蚕)	観光(黒森鉾泉)／交流活動(黒森もりもり倶楽部(東京農工大学)／特産品(みずがきそば処)	個人経営(元は黒森集落の共同浴場)／東京農工大学／みずがき・そば処	地域住民／農工大の学生／地域住民	大正期／平成17(2005)年／平成5(1993)年	—
	16	金山	山梨県北杜市須玉町小尾金山	農業集落(馬の肥育が主)	観光(登山民宿有井館, 有井館キャンプ場, 金山山荘キャンプ場)	(北杜市観光協会須玉支部)	—	—	—
	17	増富ラジウム温泉	山梨県北杜市須玉町増富ラジウム鉾泉	温泉集落	観光(増富温泉郷)	(北杜市観光協会須玉支部)	—	—	—
	18	方伝	山梨県北杜市須玉町小尾方伝	開拓集落	特産品(森のラーメン高須)	個人経営	地域住民	不明	山菜・猪鹿肉入り
	20	一の瀬	山梨県甲州市塩山一の瀬高橋	農業集落	芸能(「一の瀬高橋の春駒」)／観光(一の瀬高原キャンプ場・民宿)	一の瀬高橋春駒保存会／個人経営	地域住民／不明	平成20(2008)年	芸能
	21	高橋	山梨県甲州市塩山一の瀬高橋	農業集落	芸能(「一の瀬高橋の春駒」)／観光(一の瀬高原キャンプ場・民宿)	一の瀬高橋春駒保存会／個人経営	地域住民	平成20(2009)年／不明	芸能
	22	落合(高橋の枝村)	山梨県甲州市塩山落合	交通集落	観光(民宿)	個人経営	地域住民	不明	—
	23	柳平	山梨県山梨市牧丘町柳平	開拓集落	観光(「金峰山荘」)	個人経営	不明	不明	—
	24	念場原開拓地	山梨県北杜市高根町清里字念場原	開拓集落	観光(民宿・ペンション)	個人経営	地域住民(入植者)	昭和40年頃	—
長野	25	旧軽井沢	長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢	宿場集落	観光(クリスマスイルミネーション, 旧軽井沢銀座通り, 自然遊歩道他)	軽井沢銀座商店会	地域住民	不明	クリスマスイルミネーション(12月)

県名	番号	集落名	現行地名	元の集落特性	内容	実施中心団体	実施団体の構成	開始年	イベント内容
	26	峠町(軽井沢)	長野県北佐久郡 軽井沢町峠町	高距交通集落	特産品(峠の力餅)	飲食店3軒(峠の茶屋)	地域住民	うち1軒創業300年	－
	27	木次原	長野県南佐久郡 北相木村木次原	林業(専業製炭) 集落	観光(「長者の森」)／イベント(長者 の森フェスティバル)	自治体第3セクター／ 北相木村役場経済建設 課	第3セクター／行政	不明	マスつかみ取り・木工教 室・地元産野菜即売会
	29	川端下	長野県南佐久郡 川上村川端下	林業集落	観光(廻り目平観光施設<金峰山荘 ほか>), 特産品(高原野菜<川上村全 体。レタスなど>・水晶)	(財)川上村振興公社／ 川上村	財団法人	不明	－
	30	梓山	長野県南佐久郡 川上村梓山	林業集落	観光(旅館<白木屋旅館>), 特産品 (高原野菜<川上村全体。レタスな ど>)	個人経営／川上村	地域住民	不明	－
	31	御所平	長野県南佐久郡 川上村御所平	林業集落	観光(スキー場・ゴルフ場「シャト レーゼリゾートハケ岳」, キャンプ 場)	シーアール・エス株式 会社	不明	平成14(2004)年	－
	32	板橋	長野県南佐久郡 南牧村板橋	交通集落	観光(陶工房たわん)	陶工房たわん	移入者(神奈川県から)	平成11(1999)年	陶芸体験・体験学習
	33	野辺山開拓地	長野県南佐久郡 南牧村野辺山	開拓集落	観光(ハケ岳野辺山高原カントリー ライフ)／観光(南牧村農村文化情 報交流館)	南牧村商工会／(株)南 牧村振興公社	商工会／公社	平成元年以降	小梨まつり・アイスクラン ドルフェスティバル・ス ノーシュー体験など
	34	浦	長野県伊那市 長谷浦	林業(製炭)集落	観光(「山の家」)／村おこし(分杭峠 の「ゼロ磁場地帯」)	不明(NPOが主に利用) ／21世紀の伊那谷を考 える会	不明／民間グループ	不明／不明	－
	36	高坪	長野県木曽郡 木曽町開田高原 西野	高距自給穀作農 業集落	特産品(そば・すんき・木工品)・観光 (温泉「やまゆり荘」)／観光(開田高 原マイアスキー場)	(財)開田高原振興公社 ／不明	財団法人／不明	平成2(1990)年／ 不明	－
	37	藤沢	長野県木曽郡 木曽町開田高原 西野	高距自給穀作農 業集落	特産品(そば・すんき・木工品)・観光 (温泉「やまゆり荘」)／観光(開田高 原マイアスキー場)	(財)開田高原振興公社 ／不明	財団法人／不明	平成3(1991)年／ 不明	－
	38	関谷	長野県木曽郡 木曽町開田高原 西野	高距自給穀作農 業集落	特産品(そば・すんき・木工品)・観光 (温泉「やまゆり荘」)／観光(開田高 原マイアスキー場)	(財)開田高原振興公社 ／不明	財団法人／不明	平成4(1992)年／ 不明	－
	39	黒沢	長野県木曽郡 木曽町三岳黒沢	信仰集落	観光(御嶽神社・御嶽山登山・旅館)	(木曽町観光協会)	(観光協会)	(不明)	御嶽神社例大祭(7月)など
	40	滝越	長野県木曽郡 王滝村滝越	林業集落	観光(おんたけ森きちオートキャン プ場・旅館)／特産品(水交園<そば 処>)	個人経営(指定管理?)	地域住民(現在は移入 者)	不明／ 昭和58(1983)年	イワナつかみ取りなど
	41	漆畑	長野県木曽郡 南木曽町 吾妻漆畑	林業(木地屋)集 落	特産品(木工加工品)	南木曽ろくろ工芸共同 組合	財団法人	不明	信州南木曽・工芸街道祭り
	42	蓼科温泉	長野県茅野市 蓼科温泉	湯治場	観光(温泉旅館・ゴルフ場・スキー 場・美術館など)	(蓼科温泉旅館組合)	地域住民	不明	－
	43	中山開拓(→蓼科 湖)	長野県茅野市 蓼科湖	開拓集落	観光(温泉旅館・ゴルフ場・スキー 場・美術館など)	(蓼科温泉旅館組合)	地域住民	不明	－
	44	池ノ平	長野県北佐久郡 立科町白樺湖	開拓集落	観光(温泉・キャンプ場・スキー場・ 陶芸体験など)	(白樺湖観光協会)	地域住民	不明	白樺湖クリスタルフェス ティバルなど



	46	番所	長野県松本市 安曇番所	大野川の作り 集落	特産品(そば)	区営・個人経営のそば 処	地域住民	不明	－
	47	南原山開拓地	長野県諏訪郡富 士見町	開拓集落	特産品(そば)	蕎麦工房こまくさ	不明	不明(休店)	－
	48	強清水	長野県諏訪市 霧ヶ峰高原強清 水	夏期のみの観光 集落	観光(旅館・スキー場・グライダー・ ハイキング・ドライブイン「霧の 駅」)	(諏訪市観光協会・霧ヶ 峰旅館組合他)	－	－	－
	49	霧ヶ峰農場	長野県諏訪市 霧ヶ峰	交通集落	特産品(酪農・高原野菜)	不明	不明	－	－
	50	東餅屋	長野県小県郡長 和町和田峠	交通集落	観光(名物力餅・一里塚(史跡))	道の駅ドライブイン東 餅屋	不明	不明	不明
岐阜	51	日和田(小字)	岐阜県高山市高 根町日和田	高距自給穀作農 業集落	観光(日和田高原 日本一かがり火 まつり)	日本一かがり火まつり 実行委員会	地域住民	昭和61(1986)年～ 平成20(2008)年	日本一かがり火まつり
	53	小日和田	岐阜県高山市高 根町小日和田	高距自給穀作農 業集落	高地トレーニング用宿泊施設(「ス ポーツインオー」)	不明	不明	不明	－
	54	留之原	岐阜県高山市高 根町留之原	高距自給穀作農 業集落	観光(日和田高原 ロッジキャンプ 場、スキー場)	日和田高原センター ロッジ	不明	不明	－
	52	野麦	岐阜県高山市高 根町野麦	峠集落	観光(旧道ハイキングコース、野麦 峠の館(資料館)、お助け小屋(宿泊 施設))	高根村観光開発公社	財団法人	不明	野麦峠まつり
	55	平湯	岐阜県高山市奥 飛騨温泉郷平湯	温泉集落	観光(温泉街、スキー場、キャンプ 場)／特産品(温泉たまご、朴葉み そ、山椒、湯ノ花)	平湯温泉旅館共同組合	地域住民	不明	平湯大滝結水まつり
	56	六厩	岐阜県高山市莊 川町六厩	戦後開拓村	観光(「車止六厩」(簡易パーキング エリア))	不明(莊川村?)	不明	不明	－
	58	馬狩	岐阜県大野郡白 川村馬狩	農業集落	観光(トヨタ白川郷自然学校)	NPO法人白川郷自然共 生フォーラム	NPO	平成16(2004)年	里山遊び塾などの教育普及・交流事業
富山	59	桂	富山県南砺市桂	農業集落	「越中桂・飛騨加須良交流会」(2003)	元地域住民	元地域住民	平成15(2003)年	「越中桂・飛騨加須良交流会」(2003)

※集落番号は表3に対応している。

※各集落資源の典拠であるホームページアドレスは下記参照。

1・2：http://www.nikko-jp.org/shukuhaku.html (日光観光協会)

5・8：http://www.tsumagoi-kankou.jp/ (群馬県嬬恋村観光協会)、http://www.tsumagoi-kankou.jp/info/member-shop.html (群馬県嬬恋村観光協会)

7：http://www.tsumagoi-kankou.jp/ (群馬県嬬恋村観光協会)、http://www.g-palcall.com/ (パルコール嬬恋ゴルフコース)

10：http://www.din.or.jp/~heyaneke/gh06.html (個人ブログ)

11：http://www.kusatsu-onsen.ne.jp/youkoso/index.html (草津温泉観光協会)

12：http://www.kunimura-kankou.com/0600/0630/ (六合村観光協会)、

http://www.pref.gunma.jp/cts/PortalServlet;sessionid=712F617C6FBEC79EF853A2400E6A94F?DISPLAY\_ID=DIRECT&NEXT\_DISPLAY\_ID=U000004&  
CONTENTS\_ID=53114(群馬県、ねどふみの里保存会)

15：http://www.yumeguri.com/tabi/9912/kuromori.html (個人ブログ、黒森鉱泉)、

http://www.asahi-net.or.jp/~ue3t-cb/bbs/special/utubo\_yamanashi0/utubo\_yamanashi0\_02.htm (みしゅらん掲示板、黒森鉱泉)、

http://kuromorimori.sakura.ne.jp/ (黒森もりもり倶楽部)、http://www.city.hokuto.yamanashi.jp/hokuto\_wdm/html/joy-s/72149235925.html (みずがきそば処)

16・17：http://www.sutama.com/masutomi/masutomiHS.htm (北杜市観光協会須玉支部、増富温泉郷)

18：http://blog.goo.ne.jp/tamaho\_10/e/95d9c51e41d4eb2772a0227a3e8b8af1 (個人ブログ)

20・21：http://www.47news.jp/localnews/yamanashi/2009/01/post\_1336.html (山梨日日新聞)、

http://www.koshu-kankou.jp/mclimbing/lodging/ichinoseminsyuku.html (甲州市観光協会)、http://potapotakan.com/ (個人ブログ)

22・23：http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/kanko/relaxing/10.html (山梨市)

- 24 : <http://www.yy-net.org/blog/02006/blog/archive/2008/12/060900112835.html> (個人ブログ)
- 25 : <http://www.town.karuizawa.nagano.jp/ctg/Files/1/00403710/attach/20all.pdf>, <http://www.kazeno.info/karuizawa/4-kyuu/4-kyuu.htm> (軽井沢町統計情報), <http://www.karuizawa-ginza.org/> (軽井沢銀座商店会)
- 26 : <http://www.karuizawa.or.jp/> (軽井沢観光協会), [http://ht-kurumi.cocolog-nifty.com/diary/2006/09/post\\_a726.html](http://ht-kurumi.cocolog-nifty.com/diary/2006/09/post_a726.html) (個人ブログ, 峠の力餅)
- 27 : <http://www.mapple.net/spots/G02001100502.htm> (MAPPLE 観光ガイド), [http://machimura-nagano.jp/blog/kitaai/2008/06/post\\_1.php](http://machimura-nagano.jp/blog/kitaai/2008/06/post_1.php) (まちむらナガノ「北相木村ブログ」)
- 29 : <http://machimura-nagano.jp/blog/kawakami/> (まちむらナガノ, 川上村), [http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05\\_shukuhaku.html](http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05_shukuhaku.html) (川上村), <http://www.kawakami.or.jp/> (川上村振興公社), <http://mineralhunters.hp.infoseek.co.jp/kawahakehukin.html> (個人ブログ, 長野県川上村川端下附近の鉱物)
- 30 : <http://machimura-nagano.jp/blog/kawakami/> (まちむらナガノ, 川上村), [http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05\\_shukuhaku.html](http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05_shukuhaku.html) (川上村), <http://www.geocities.jp/gra3106picpher/sirokiyaryokan.html> (個人ブログ, 白木屋旅館)
- 31 : <http://machimura-nagano.jp/blog/kawakami/> (まちむらナガノ, 川上村), [http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05\\_shukuhaku.html](http://www.vill.kawakami.nagano.jp/kanko/05_shukuhaku.html) (川上村), <http://www.chateraiseresort.co.jp/SKI/company.html> (シャトレーズスキーリゾートハケ岳)
- 32 : <http://www.t-tawan.com/> (陶工房たわん), <http://www.shop-tawan.com/tenshu.html> (陶工房たわん, 店主あいさつ)
- 33 : <http://www.minamimaki.or.jp/> (南牧村商工会), <http://www.ytg.janis.or.jp/~nobeyama/kanko/index.html> (野辺山観光宿泊案内所), <http://www.avis.ne.jp/~with/> (南牧村農村文化情報交流館)
- 34 : <http://inamai.com/news.php?c=shakai&i=200708161805020000022261> (伊那 MY ウェブニュース), <http://www.nagano-np.co.jp/modules/news/article.php?storyid=5802> (長野日報), <http://www.minamishinshu.co.jp/news/2004/newyear/11.htm> (南信州サイバーニュース), [http://www.cbr.mlit.go.jp/mibuso/information/dam\\_news/pdf/damu\\_21/dm021\\_02.pdf](http://www.cbr.mlit.go.jp/mibuso/information/dam_news/pdf/damu_21/dm021_02.pdf) (21世紀の伊那谷を考える会)
- 36 ~ 38 : <http://www.zoone.com/factory/soba.html> (開田高原振興公社), [http://www.kankou-kiso.com/kisomati/aji\\_kougei/data/004.jsp](http://www.kankou-kiso.com/kisomati/aji_kougei/data/004.jsp) (木曾町観光協会, すんき), <http://www.mia-ski.com/> (開田高原マイアスキー場), <http://www.kaidakogen.jp/> (開田高原公式 HP)
- 39 : <http://www.kiso.ne.jp/~ontake.85.kt/sub0.html> (木曾御嶽山黒沢口登山道の案内), <http://www.kurosawakan.com/> (ようこそ黒澤館&石室山荘へ)
- 40 : <http://news.livedoor.com/article/detail/3185733/> (livedoor ニュース), <http://farwestwest.blog22.fc2.com/blog-category-9.html> (個人ブログ, 水交園), <http://www.ontake.jp/travel/stay6.html> (王滝村観光ワールド, 滝越エリア), [http://ontake-web.sakura.ne.jp/outdoor/ca\\_02.html](http://ontake-web.sakura.ne.jp/outdoor/ca_02.html) (王滝村観光ワールド, おんたけ森さちオートキャンプ場)
- 41 : <http://www.nagiso-town.ne.jp/modules/tinyd/content/index.php?id=5> (南木曾町観光協会公式 HP), <http://www.kougei.or.jp/nagisorokurozaiku/> (南木曾ろくろ工業組合)
- 42・43 : <http://tatesina.com/annai.htm> (蓼科温泉旅館組合)
- 44 : <http://shirakabako.com/map/index.htm> (白樺湖観光協会), <http://dSPACE.wul.waseda.ac.jp/dSPACE/handle/2065/3676> (論文第4章)
- 46 : <http://www.chizumaru.com/mapple/mappleLM/lmap.aspx?TGUID=20000793> (レジャー検索), [http://www.city.matsumoto.nagano.jp/azumi/kanko/k\\_meisn/k\\_meisn.html](http://www.city.matsumoto.nagano.jp/azumi/kanko/k_meisn/k_meisn.html) (松本市安曇支所)
- 47 : <http://www8.shinmai.co.jp/soba/sobaten/data/307.php> (信州そば漫遊)
- 48 : <http://www.suwakanko.jp/nature/index.html> (諏訪市観光ガイド, 霧ヶ峰)
- 49 : [http://www.daiken.jp/kirigamine/blog/archives/2008/09/post\\_286.html](http://www.daiken.jp/kirigamine/blog/archives/2008/09/post_286.html) (個人ブログ, 霧ヶ峰農場)
- 50 : <http://kaidouarukitabi.com/5kaidou/nakasen/nakasenwadatouge.html> (個人ブログ, ドライブイン東餅屋)
- 51 : <http://giftgift.sakura.ne.jp/06ivent/kagaribi.html> (飛騨高山の旅行観光ガイド), <http://azusaya-hidatakayama.blog.so-net.ne.jp/2008-08-29> (個人ブログ)
- 53 : <http://www.hola-inn.com/> (スポーツインオラ)
- 54 : <http://www.okuhi.jp/Hiwada/FRTop.html> (日和田高原ロッジキャンプ場)
- 52 : <http://www.hida.jp/kouyou/index.html> (高山市観光情報), <http://www.takanekankou.or.jp/nomugi/index.cgi> (岐阜県立自然公園 野麦峠)
- 55 : <http://hirayouonsen.or.jp/play/about.html> (平湯温泉旅館共同組合)
- 56 : [http://odekake.jalan.net/spt\\_21603ah3330041383.html](http://odekake.jalan.net/spt_21603ah3330041383.html) (じゃらん)
- 58 : <http://www.toyota.eco-inst.jp/main.html> (トヨタ白川郷自然学校), <http://www.f-ess.jp/> (NPO 邦人白川郷自然共生フォーラム)
- 59 : <http://www4.ocn.ne.jp/~gassyou/katura03.html> (個人ブログ)

表6 インターネット検索による現在の集落資源(廃村集落)

県名	番号	集落名	現行地名	元の集落特性	内容	実施中心団体	実施団体の構成	開始年	イベント内容
群馬	1	元山(後に西山)	六合村入山元山	鉱山集落	跡地に「JFE奥草津休暇村」	(JFE健康保険組合)	－	不明	－
長野	2	奥三川(板小屋の改称)	長野県南佐久郡南相木村	三川の出作り集落	観光(南相木ダム(奥三川湖):散策路)	－	－	平成16(2006)年完成	－
	11	大平	長野県飯田市大平	交通集落	観光(「いろりの里大平宿」)	大平宿をのこす会	NPO	昭和48(1973)年	「原生活体験」(宿泊体験)
	13	稗底	長野県諏訪郡富士見町広原	記述無し(江戸時代に廃村)	廃村(指定史跡 稗之底古村跡(自然散策路))	－	－	－	－
岐阜	16	加須良	岐阜県大野郡白川村加須良	農業集落	「越中桂・飛騨加須良交流会」(2003)／「蓮如の道復活プロジェクト」	元地域住民／NPO法人白川郷自然共生フォーラム	元地域住民／不明	平成15(2003)年／不明	「越中桂・飛騨加須良交流会」(2003)／「蓮如の道復活プロジェクト」
富山	17	有峯	富山県富山市有峰	兼業山小屋集落	観光(「有峰森林文化村」)	有峰森林文化村会議	「有峰村民(有峰で積極的な活動を行う人々)」(主体は富山県)	平成14(2002)年	年間を通した計画
福井	18	中島	福井県大野市中島	林業集落	観光(「麻那姫湖青少年旅行村」(レクリエーション施設))	大野市公共施設管理公社	財団法人	不明	－
新潟	29	吉ヶ平	新潟県三条市吉ヶ平	記述無し	宿泊施設(吉ヶ平山荘:元分校)	吉ヶ平保存会	地域住民(吉ヶ平出身者など三条市民)	不明	山荘修繕や草刈りなどの周辺整備

※集落番号は表2に対応している。  
 ※各集落資源の典拠であるホームページアドレスは下記参照。  
 2: <http://www.minamiaiki.jp/aikidamu.htm> (南相木村)  
 11: <http://oodaira.net/> (NPO 大平宿をのこす会), <http://plaza.harmonix.ne.jp/~udagawa/oodairajyuku.htm> (個人ブログ, いろりの里大平宿・原生活体験)  
 13: <http://kimamana.info/walk/aruku/hinosoko-0927.html> (個人ブログ, 稗之底)  
 1: <http://www.kenpo.gr.jp/jfekenpo/hoyou/okukusatsu/index.htm> (JFE 健康保険組合)  
 16: <http://www.toyota.eco-inst.jp/whatsnew/n0507291.htm> (トヨタ白川郷自然学校), <http://www4.ocn.ne.jp/~gassyou/katura03.html> (個人ブログ)  
 17: <http://www.arimine.net/top.html> (ありみネット), [http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/1603/kj00000722-002-01.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1603/kj00000722-002-01.html) (富山県)  
 18: <http://www.fuku2.co.jp/manahimeko.html> (福ふくガイド), <http://www2.plala.or.jp/onosizen/imayamazato/PAG8.htm> (個人ブログ)  
 29: <http://www.city.sanjo.niigata.jp/shokokanko/page00045.html> (三条市), <http://www.kenoh.com/2008/06/09yosigahira.html> (ケンオー dotted コム)

### ③……………文化資源化の新たな展開

「限界集落論」は以上のように、実体のないネガティブな進歩史観そのものである。しかし、それだからこそ深刻な問題でもある。この進歩史観によって作られた「構造」は、農村生活者の活動様式までをも規定しつつある。達観的に導き出される陰惨な将来予測は、個々の生活者主体の意欲や自律性をも奪っており、それが具体的な農村地域の荒廃をもたらしはじめている。そうした「構造」に対し異議を唱えることは可能であろうか。それには科学的数値を駆使した実証的な研究が必要であると考えられよう。しかし、実はそうした方法はあまりに迂遠であるようにも思う。客観的研究的なアプローチは、農村における、多様な人間活動を「分類し、命名し、標準化し、公共の文化財として知のカタログに登録し」て、反限界集落論という権力的な言説を構築しようとする行為である<sup>(21)</sup>。所詮、「構造」というものの本質をつかめない以上、別な「構造」をぶつけて抗うしかないわけであり、権力的な言説を生み出すことはやむを得ないことではある。しかし、この「限界集落論」に対する限り、現況は逼迫している。そうした「科学」的「客観」的方法はあまりに迂遠であるし、これまで役に立った試しをほとんど見聞したことがない<sup>(22)</sup>。「限界集落論」という構造に対抗するため、新たな「構造」を構築するのであれば、限界集落や準限界集落と呼ばれる地域に住む生活者とともに、その持つ卑近で切実な問題の解決を図りながら実務的に対抗する構図を想定しなければならない。

現実の問題に当たりながら、支配的な「構造」そのものに反駁する。実践の中で実証し挑戦していく方法である。そのための原資こそが、個々の地域に固有で、多様性に満ちあふれた農村生活の「記憶」である。それはかねて民俗調査の対象でもあり、農村文化や「ふるさと」というものを構成する主要な要素群でもある。それはまた人間主義的進歩史観に、「多様な民俗文化」に基づく「複数の日本論」をもって対抗した日本民俗学<sup>(23)</sup>に固有な方法である。そしてそれが故に、限界集落化の問題は、日本民俗学がその解決の一端を担わなければならない新たな課題である。

前章で、「廃村」での活動を事例に、「集落の記憶を現代に活かす」というように記述した。現象を恣意的に分析すれば、単に出身者が交流会をし、廃校となって朽ちていく出身小学校を何とかしようという、まさに「ノスタルジー」に溢れた行為である。その「ノスタルジー」が現実の地域維持等に役立つか疑問に思われることだろう。しかし、「記憶」の再生とは単なる個人的感傷のレベルに留まるものではない。また一方でナショナルな言説に拡大するものでもない。地域生活者の「記憶」を、その生活圏（地域）の問題を解決するための技術として、様々な主体間のコミュニケーションを介し、独自に資源化していく営為が生じつつある。いわば「ふるさと」（文化）資源化の新たな展開である。ここでは三つの事例を紹介しよう。

#### (1) 島根県大田市大代町での再生

一つ目の事例は、島根県大田市大代町の地域内小河川管理活動の事例である。大代町は大田市の南部山間地域に位置する旧村である。現在戸数は約370戸、高齢化率は49%である。筆者は2002年の春、農林水産省中四国農政局の委託調査のため大代町を訪れた。当時の高齢化率は47%、当時も現在も「限界集落論」の分類では準限界集落ということになる。来年か再来年には限界集落へ



と「昇格」されるだろう。

この時、筆者は文化的・地域資源調査を委託されていた。将来の地域振興に資する農村生活文化の抽出を求められていたのである。4人の調査グループで2年間にわたり受託調査を行い、それなりの報告書を提出したが、我々が調べ上げた生活文化の類は行政の耳目を引くことはほとんど無かった。

民俗学の中においても、最も行政に近い（というより行政の末端としての研究職の）立場にあるにも関わらず、行政の旺盛な文化資源化と、ナショナルな言説への統合の意欲ということ、筆者はほとんど感じる事ができない。それゆえ、行政的宣伝文句に現れる「農村の文化」なる言葉にほとんど意味を感じない。「ナショナル」な統合などと言うことを、少なくとも農林水産行政の公務員は、全く意識していないというのが率直なところである。この受託調査においても、筆者らが労力を掛けて作り上げた報告書にほとんど意味はなかった。農政局の関心は、農地の効率的利用を可能にする圃場整備事業（農地再編事業）の実施にあるのであって、農村文化というものは、そうした事業の根幹に添えるちょっとした飾りに過ぎなかった。あまり行政の美辞麗句に反応しすぎると本質を見失う。行政の農村への関心は、何処まで行っても経済的効率化にある。「おまつり法」「ふるさと文化再生事業」等の文化事業も、その目的は都市農村交流活動等による農村の経済的な自立にあり、ナショナルな国民統合にあるわけではない。誠に残念なことに、行政は文化の経済効果を探っているものであって、文化を文化として重視しているわけではないのである。

しかしながら、冷淡な行政に対し、地域生活者の反応には著しいものがあつた。大代地区に伝承される小笠原流田植え囃子についての聞き取りの際には、当時公民館長であつた横手新治郎氏（この時60才）とともに、80歳代の高齢者から、昭和初めの農作業の様子から、いかなる時に田植え囃子が行われたのか、そして最初に唄われる「サンバイ卸し」の意味を聞き取りできた。公民館長にとって作神「サンバイ」の伝承が、特に胸を打ったようである。この当時、大代地区の田植え囃子は、学校行事として地区の小学生と中学生によって担われていた。しかし、翌年に予定されていた中学校の統廃合により、田植え囃子の存続が危ぶまれていたのである。地域の祖先たち（祖霊）と濃厚な関係性をもって語られる「サンバイ卸し」と田植え囃子の意味を初めて聞いて、横手氏は、田植え囃子の存続を議題とする次回の会合で、集落の皆を何とか説得して、皆で存続してもらえるよう説得しましょうと約してくれた。そして、その約束どおり、それから6年経った現在でも大代町では7月17日の十七夜（元は町内の弁財天の祭日、厳島神社の管弦祭にあたるのだろう。農休みも兼ねていた）に毎年、田植え囃子が披露されている。子どもたちだけではなく、その親世代も参画し、多くの世代によって担われている。4年前には、それまで人手不足ということで軽トラの荷台に載せられて巡幸していた御輿も、大人たちの肩に担われるようになった。その前後を子どもたちが賑やかに囃しながら巡幸する。「限界」という言葉の意味を疑うような光景である。

さらに、別な聞き取り調査の際には、五月魚のタブーについて話を聞くことができた。八反田川という町内の小河川に生息する小魚であるハエ（カワムツ）の背に、稲の作神サンバイが乗って山から降りて来るので、田植えが終わるまで五月のハエは採ってはいけない、という伝承である。大田市大田町内において、この時期の小魚をサクラバエと呼称していたらしいことが聞き取れている。現在は「所詮は検証し得ない仮説にすぎない<sup>(24)</sup>」とされているが、「サの神の神鞍（クラ）」というサ

クラ（桜）の語源に関する説を裏付ける一つの証拠として提起できる伝承である。しかし、その後聞き取りを継続して行ったものの、サクラバエについての新たな情報を得ることは出来なかった。知らない、と押し黙るわけではない。川やハエについて聞き取りすると、生活者の一人一人が実に多弁になる。皆が皆、サクラバエの話はせずに、アカモチのことを熱心に話すのである。アカモチとは成長した大きなハエのことである。ハエは春になると喉元から腹部にかけて紅色の婚姻色を発するが、成長するとこの婚姻色が定着し、一年中赤みを帯びるようになる。この大きくて赤いハエのことをアカモチという。ハエについて聞き取りすると、30才代後半から80才代まで、ほとんど全ての住民が、川で遊んだ話、遊びながら大きなアカモチを捉えた話をするのである。楽しく、また誇らしい「記憶」なのであろう。しかしながら、その時、かつてアカモチが棲んでいた地域内の小河川は荒廃していた。

中国山地内の村々を歩いて、その景観の美しさに心奪われることが多い。しかし、それは遠景の山々と、管理された田の景観である。少し視線を移せば、そこには荒廃した景観が広がる。里山とか里川とか呼ばれる近景の山河である。「過疎・高齢化」、また「限界集落化」のせいで、人の手が入らなくなったため荒廃したと、よく言われる。大代町においても例外ではなく、町内を流れる八反田川には葦が生い茂り、その葦の根元には砂が堆積していた。聞けば、かつては集落共同の管理活動が行われていたが、もう30年近く人の手が入っていないという。アカモチの話をしてくれた幾人かの人々も、もう川が荒れてしまってハエはいないだろう、と語っていた。

しかし、ハエはまだ八反田川に棲んでいたのである。同年秋、筆者はまた横手氏とともに八反田川を踏査した。川は岸から見る以上に荒廃していた。大量の葦が行く手を遮り、所々堆積した砂を水流が削り深みを作っていた。しかし、川の砂を巻き上げながら前進していくと、その巻き上げた砂に餌になるものがあるのだろうか、数え切れない数のハエが筆者と横手氏の足下に群れてくる。そうしたハエを採取しながら、苦労して葦をかき分け2kmほど八反田川を遡上した。その間、横手氏は様々な記憶を語ってくれた。それは、荒廃した現況とのギャップに驚いているようでもあり、採取したハエとの再会を喜んでいるようでもあった。そして、川から上がり、田の端で休んでいる時、横手氏は言った。こんな状況では今の子どもたちは川で遊べない。私たちが子供の頃は親が草を刈っていた。こんなに葦が伸びてしまうと難しいが、春に葦が芽を出した頃刈ってしまえば、後の管理は楽になるだろう。そうして翌年、30年ぶりに八反田川の管理活動が始まったのである。

ここまでの話は、別稿にも紹介した<sup>(25)</sup>。2003年、八反田川の草刈りが行われて、ホタルが大量に発生し、町内ではホタル祭りが開かれた(2004年)。また、大田地域一帯に2年連続で集中豪雨があったにもかかわらず(2005年・2006年、特に2006年の水害は60年に一度と言われるほどひどいものであった)、稲作への被害はほとんどなかった。管理される前までは八反田川が溢れ、堆積した砂が田面を覆い深刻な被害を受けたという。目に見える形で管理の効果を確認しながら、管理活動は拡大しながら現在も継続している。2007年には耕作放棄された水田を利用して、子供たちが自由に遊べるジオトープ水田が手作りで作られた。しかしながら、どうも子供たちの姿をあまり見かけない。一方で、きれいになった八反田川に子供たちが遊んだ痕跡を多く見ることが出来る。生け簀にしたような水たまり、流れをせき止め小さなダムのようにした石組み、魚を採ったのだろう放置された粗末なたも網。子供会や小学校でも川遊びや生き物観察会が実施されているという。地域

の子供たちは子供たち自身で再生された川で遊んでいるのだ。30年もの間の川との没交渉のため途絶えかけたアカモチの伝承も、この地域で育つ子供たちによって豊かに再生されるだろう。さらに町内の柿田集落では、特筆すべき出来事が起きた。柿田は横手氏の住まう集落であり、八反田川の管理活動やピオトープ水田作りを中心になって担ってきた集落である。この柿田では八反田川の管理を行いながら河川脇の耕作放棄地を少しずつ菜の花畑やソバ畑として再生してきた。そして、



写真1 雑草が刈り払われた最後の耕作放棄地

2008年6月、ついに集落内の耕作放棄地のほぼ全てを再生させた。もうすぐ限界になるといわれた準限界集落で起きた出来事である。<sup>(26)</sup>

そもそも大代町では、地域の伝統食であるソバ作を再生し、十割蕎麦を試作したり、かつての生業であるコウゾ・三稜作りを復活させたりと、以前から様々な生活者レベルの実践が試みられていた。しかし、地域全体としては大田市域内で最も高齢化の進んだ地域であり、それに伴う行政サービスの後退等により、「限界集落論」から来る悲観的将来像に侵されてもいた。そうした中で、生活者の観念が、限界集落という「構造」に支配されることなく、果敢に様々な取り組みを行い、成果をあげ、地域生活を明るい展望をもって維持できているのは、他ならぬ地域に暮らす主体の力によるものである。主体に内在する「記憶」を、具体的な知恵や技能として再生し、資源化し、利活用した結果である。そして、それは地域に暮らす生活者にとって、「ふるさと」や「農村文化」という文脈で理解されているように思う。蕎麦打ちや川遊びなどという「生業」や「遊び」は、あまりに卑近なことであるがゆえに、一見本質主義的と見える価値付けを与えない限り、資源として認知されることはない。農村生活者は少し前まで「近代化」しなければ生き残れないと言われ、地域固有の「記憶」や「体験」を否定され続けてきたのである。「文化」や「ふるさと」の資源化に対する批判、「ノスタルジー構築」に対する民俗学者の自覚なるものは、そうした生活者自身の努力に民俗学者が水を差し、「限界集落論」という構造の構築・強化に民俗学者が荷担する、ということになりはしないだろうか。民俗学は、むしろ生活者の「記憶」や「経験」を、それぞれの地域現場において積極的に資源化し、新たな農村の可能性を様々に見出し、個々の生活者と共有するべきであるように思う。

## (2)新潟県十日町市松代での創造

新潟県南部、長野県境に位置する「越後妻有」地域では、現代アートによる地域振興が図られている。これまでに2000年、2003年、2006年にアートトリエンナーレ（「大地の芸術祭」）と呼ばれる壮大なイベントが行われ、2006年の開催においては、一夏に延べ35万人もの観光客が訪れたという。<sup>(27)</sup>近年ではアートトリエンナーレ以外の年にも夏と冬に「大地の祭り」という、地域生活者との協働によるイベントも開催されている。当地域は全国的に見ても有数の豪雪地帯であり、年間降



雪量の平均は10mを超える。また農業の生産基盤にも恵まれているとは言えず、棚田が広がる山間地域では集落の上部に水田があることも多く、田のことを「ヤマ」と呼ぶ。それがゆえに生活条件も厳しく、過疎高齢化が進んでいる。2005年までの50年間で地域全体で40%もの人口が減少し、<sup>(28)</sup>高齢化率も30%を超えているという。

そうした「越後妻有」地域の中でも、過疎高齢化が著しいのが旧松代町（現十日町市）である。1955年から2005年までの50年間の人口減少率は72%、高齢化率は41.5%にも及ぶ。町内には限界集落化した集落も多く、廃村となった集落さえある。

この旧松代町には、この越後妻有アートトリエンナーレを代表する芸術作品が展示されている。常設展示となっているので、深い雪に覆われる冬期を除き、いつでも鑑賞出来る作品である。「カバコフ+福島さんの棚田」という作品である。



写真2 カバコフ+福島さんの棚田

この作品は、アートトリエンナーレ、ならびに「大地の祭り」の中核的交流施設であるまつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」の眼前に広がる棚田に2000年第一回アートトリエンナーレにて設置された作品である。伝統的な稲作の五つの場面（田起こし、播種、田植え、除草、稲刈り）を写した彫刻作品からなるが、その制作に当たったのがイリヤ&エミリア・カバコフという夫婦のロシア人作家であり、棚田の所有者が福島友喜氏である。中学校の美術教科書にも掲載され、2008年には高松宮記念世界文化賞も受賞している。

この「カバコフ+福島さんの棚田」は、農舞台のバルコニーから鑑賞すると良い。バルコニーにはそれぞれの場面についての詩文がスクリーンに記されており、遠景にある棚田の作品と重なるように出来ている。四季それぞれに色合いを遷し、農業者の汗や思いを感じられる立体絵本のような作品である。

その詩文を紹介しよう。



---

四月、輝く太陽。雪は消え、湿っぽい霞が空中を充たす。  
ずんぐりした馬が、重い耕作用の鋤を懸命に引っ張る。  
春のうちに、田んぼの準備を入念に。  
新たな播種と種の植え付けのために。

五月の初め、太陽が照りつけ始める。  
水に充たされた田の面が、暁の光に光る。  
経験豊かな手が、暖まった大地に種を播いてゆく。  
鋭く尖った芽が、大地から濃く生い立っていくように。

五月の太陽の下に木々は芽吹き、田の水はぬるんてくる。  
大地から生えた茎は伸びてゆく。  
植え付けられた植物が大地を着飾らせるように。  
奇妙な木製の杵、タワクを転がして。

八月、暑さは頂点に達し、玉のような汗が滴り落ちる。  
だが、休むいとまはなく、棚田から棚田へと刈ってゆく。  
雑草が稲を覆ってしまわないように。  
静かな稲。

人影は見えないほどに、高く成長した稲穂。  
九月。鎌をふるい、一粒も残さず収穫を取り込む時だ。  
田から、重い束をやっとのことで運び去る。  
十月までにはすっかり乾燥させ、脱穀する<sup>(29)</sup>ためだ。

カバコフ自身が書いたものを日本語に翻訳した詩文である。ロシア人が書いたものである。何故、稲作とは縁遠いはずのロシア人が、稲作を題材として、日本人にも高く評価される作品を制作することができたのだろうか。

カバコフは、作品制作にあたり、最初からこの棚田を展示の場として希望していた。しかし、田の持ち主であった福島氏は良い返事をしなかったという。高齢で跡継ぎも無く、その棚田はもちろん農業そのものをやめようと考えていたからである。その返答には、長年続けてきた農業を辞めなければならないこと、親親が耕作してきた田を荒らしてしまうことへの苦渋の色が滲んでいたことだろう。カバコフとそのアシスタントとして働いていたボランティアの若者は、福島氏の返答を受け、猛烈に勉強したという。『松代町史』の生業部分を英訳し、必ずしも英語が得意ではなかったカバコフは苦勞してそれを読みこなした。そして、福島氏はじめ地域の生活者から聞き取りをし、松代という土地での暮らしや、農業という生業、そしてそれに携わる生活者の思いを、「わかって」「理解しよう」と努めたのである。そして、作品案を練り直した。その作品案に福島氏は反対しなかつ

---

た。そして辞めようと考えていた棚田での稲作を、その後6年間、体力の続く限り継続し、カバコフやその若者の熱意に応えたのである。<sup>(30)</sup>

現代アートなどといえ、我々民俗学とは縁遠い、どこか違う世界のここのように感じられるかも知れない。しかし、この作品制作にあたり、カバコフとボランティアの若者が熱意を込めて行った営為は、民俗学徒がこれまで行ってきた学的営為と重なりはしないか。民俗学の最も根源的な欲求は、地域の生活者の心意を理解しようとするにあるだろう。『松代町史』という民俗学の成果が有効に活用されたことも、その証左である。このカバコフと若者、そして福島氏のコミュニケーションな理解が、放棄されようとしていた棚田を6年もの長きにわたって維持させたのである。この事例が示唆する意味は極めて大きい。

この「カバコフ+福島さんの棚田」は一つの象徴的な作品である。実はこの越後妻有のアートトリエンナーレで制作された作品の多くは、農村の環境の中に展示されている。それらは地域生活者やボランティアの若者、そして芸術家の濃厚なコミュニケーションの中で理解され、共有され、大事にされてきた。中には展示予定の集落に住民票を移し、1年以上住み込んで仕上げた作品もある。住民票を移したかどうかは別として、数ヶ月から1年間、その集落に住み込んで、地域の生活者と交流しながら、支えられながら、相互の理解のもとで作られた作品が多い。大地の芸術祭総合ディレクターである北川フラム氏は次のように記している。

「カバコフの棚田でもそうだが（福島さんはもともとそれほど反対ではなかったが）多くの場合、他者の土地に作品をつくろうとする時、反対されることが多い、というよりは凄厲反撃にあう。それは当然のことだ。しかし、この地域を学び、話を聞く末に出された提案は、この地と農業に対する敬意をもつが故に、「会期中の50日ならよい」ということになり、場合によっては「ずっと設置していても構わないから、是非」というケースにもなっていく。

.....

アートは赤ん坊のようなものではないか。突然の誕生に周囲は困惑する。しかしこの何の生産性もないひとりでは生きていけない生命は、それ故に多くの人がかかわらざるをえない。「赤ん坊とは・・・」という説明も必要だ。それによって周囲の人々がつながっていくのである。他者の土地にものをつくるのが、閉鎖的なたてわりの世界にもたらす開口部は多く広い。そこにコミュニケーションが生まれてくるのである。<sup>(31)</sup>

地域に学びながら、地域に赤ん坊として参与していく。そして、赤ん坊は多くの人との関わりの中で成長し、新たな地域社会の関係性を構築する。その社会そのものを新たに再生していくのである。まるでレイヴ&ウェンガーの「正統的周縁参加」のようである。そしてそれは、小林康正によれば「伝承」という実践そのものである。<sup>(32)</sup>

この赤ん坊としての学びの中に、民俗学がもたらした成果は有意に役立っている。農舞台には『松代町史』や『奴奈川の民俗』はじめ、地域の民俗学関係の著作が収蔵してある。<sup>(33)</sup> またここ数年間行っている筆者らの民俗調査や、筑波大学の民俗学調査実習へ積極的に協力いただいている。それは農村生活の理解に基づく作品制作の便宜を図るためであり、地域生活者との豊かな関係性の構築のためである。そしてその最終的な目的は、過疎・高齢化に直面する農村地域の振興にあり、農村生活

の永続にある。<sup>(34)</sup>現在のところ、その試みは他に類を見ないほどの成功を収めていると言って良い。

松代をはじめとする「越後妻有」地域で制作され、展示され、残されていく作品群は、アートという意味で文化であり、地域生活を理解し象ったものという意味で地域文化を資源化したものであると言えるだろう。しかし、その資源化の過程には、制作する作家の理解があり、それを地域の資源として認める生活者たちの理解がある。その背後にはまた、作家や地域生活者とともに働くボランティアの若者たちの理解もある。それらの理解は、多様な主体間の関係性の中から生じる、いわばコミュニケーション的な共有認識の構築にあたる。既に資源化されてしまった「文化」や「ふるさと」を単体で見て分析すれば、確かに多くの問題が見つかるかもしれない。しかし、資源化の過程を見れば様々な人々の賞賛すべき実践と協働がある。それこそが現実の問題の解決に大きく寄与していることを忘れてはならないだろう。

### (3)岩手県下閉伊郡岩泉町での試み

島根県大田市大代町では聞き取りの結果明らかになったサンバイ伝承や川遊びの記憶が伝統芸能の伝承や河川環境の再生、そして耕作放棄地の解消に繋がった。新潟県十日町市「妻有」地域では、民俗学の成果や独自の地域農業に対する聞き取りが多様な主体間の理解を促進し、様々な芸術作品が作られ、比類無い地域振興への効果を生み出している。民俗学が主たる対象としてきた事象、そして理解しようとして行ってきた調査活動そのものが、農村地域における「限界集落論」という構造に對抗し、現実の問題を解決するための具体的な糸口になっているのである。民俗学の培ってきた成果や方法には大きな可能性がある。それを意識的な実験によって明らかにしようと、筆者は一つの企てをした。

現在、官製の地域振興活動を行う上で、必ずと言って良いほど行われるものが、住民参加型ワークショップという一種の住民会議である。会議室に座して議論しても真新しい意見は出にくいことから、環境点検法やTN法というような技法が用いられ、地域の課題や可能性が住民の参加の下、整理されていく。<sup>(35)</sup>こうした試みには確かに意味がある。かつて農村における事業はトップダウン式に行われることが多く、その内容も画一的なものであった。いわゆる産業としての農業の効率化や、住環境としての農村の都市化ということが目途とされていたのである。しかし、それら事業は、考えられていたほどの効果を挙げる事が出来なかった。地域の特性や、地域住民のニーズを反映することなく行われる圃場整備や住環境整備は、いわば人間主義的進歩史観の攻勢そのものであったのである。それぞれの担当者に悪意が有ったわけではない。現在の農学系技術者においてさえ、まま見られることであるが、彼らは効率化や都市化が農業・農村を良くする方向であると真摯に考えていた。たまたま、農業を巡る時代相（米食の低下や農産物輸入自由化等々）の変化もあり、支配的なイデオロギーとしての責務を果たせなかっただけである。

そうした状況を受け、近年の事業では住民参加型と言うことが非常に重視されている。その具体的な現れが、ワークショップによる事業計画の策定なのである。これは一歩前進であると評価できるし、実際に上記のワークショップ技法を手慣れた担当者が行えば大きな成果が得られる。しかし、月並みな構想しか描けないワークショップも決して少なくない。その場合、住民は客体として参加しているだけで、自らが地域の中で実践する主体であるという意識が希薄なのであろう。そうした

場合、往々にして政策や時代相の批判といった他者批判に終始し、住民自らは被害者という位置づけになる。そうした住民は決して少なくない。本来は自律的な実践者であるはずが、知らず知らず「過疎高齢化論」「限界集落論」の構造下に組み伏せられているのである。

先にも触れたが、高度経済成長期に代表される「西欧的、工業的、都市的」な農村「近代化」というナショナルな人間主義的進歩史観に対し、民俗学は農村それぞれに実在する「複数の民俗文化」の重奏からなる「複数の日本論」を提起し、それに本質主義的色彩を帯びさせることによって対抗してきた。今また、大代町や松代町では、民俗文化的知見が「過疎高齢化論」や「限界集落論」の軌から離れた自律的な生活者主体を再創造した。こうしたワークショップの場でも、民俗学の成果が生かせるのではないか、それにより生活者主体による健全な文化の資源化と利活用が出来るのではないだろうか。

平成19年の初冬、岩手県下閉伊郡岩泉町町民センターにおいて、本歴博共同研究会と岩手大学農学部付属寒冷フィールドサイエンス教育研究センターの共催による「'07 フォーラム 膝詰め談義 伝え承ける岩泉の暮らしと文化」と題する町民向け講演会が実施された。講演者は双方の研究会の構成員と、岩泉で地域振興活動に取り組む方々であり、80人程度の聴衆ご参集のもと、貴重な講演が行われた。筆者もその講演者の一人として話をしたのであるが、その席上、企てた試みを実行したのである。この時、筆者は岩泉に2度目の訪問、調査らしい調査は全くしていないままであった。

地域社会とほとんど接点を持たないままでの講演であったのだが、筆者は講演内容に工夫を加えた。『岩泉地方史』の民俗部分から、「生業」や「子供の遊び」についての記述、それも伝聞や文献から記載されたものではなく、執筆者が自分自身の体験として書き記している部分を抽出し、市販のプレゼンテーションソフトにまとめ、それをもとに聴衆である住民皆さんと対話していく体裁をとったのである。<sup>(36)</sup>

そのプレゼンテーション画面をここで紹介しよう。まずは生業部分の画面である。生業では生活者の協働作業として屋敷の新築である「ヤドコ」と「亀の子づき」について取り上げた(図1)。

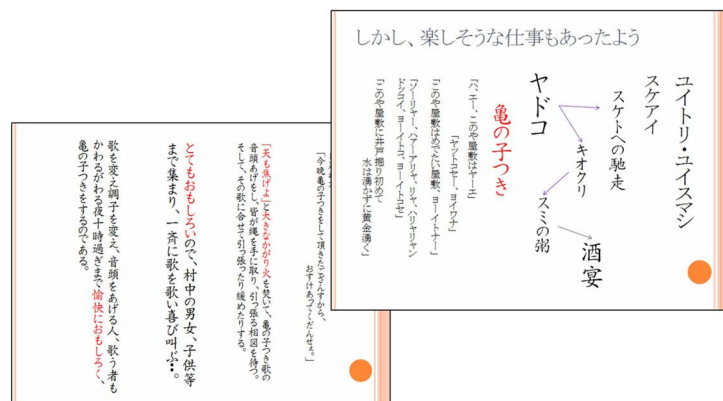


図1 生業(ヤドコ)のプレゼンテーション画像



見ての通り、ただ単なる『岩泉地方史』の引用である。これを右の文章からフェードインさせて聴衆の反応を見ながら基本的には読み上げた。<sup>(37)</sup>

ヤドコにおいてキオクリと呼ばれる落成式には、「スミのかゆ」と呼ばれる行事が行われたという。招待したスケト（助人）の若者から5人を選び、1人が新築の座敷の中央に座り、他の4人が四隅に座り、グツグツと煮立った熱い粥を、合図によって一斉に食べ始める。そして一番先に食べ終わった若者が、他の4人から箸を奪い取り、その箸とヘラ、杓子を藁縄で編みあわせて天井に昇り、棟木に結い付けるという行事であった。その行事の件になると、聴衆の高齢男性が「そうそう」と頷きながら満面の笑みとなる。「この後、盛大な呑み会をされたんですね」と声を掛けると、「そうそう、楽しかったな」と応えるのである。

「亀の子づき」の件では、さらに大きな反応があった。「亀の子づき」は新築予定の屋敷地の地ならし、地固めである。「亀の子石」と呼ばれる大きく頑丈な石に、丈夫なフジツルや藁綱を付け、そこから4～5本ずつのヒキツナを付け、皆でヒキツナをもって、「亀の子つき歌」で調子を合わせながら引っ張ると大きな石が1m以上も持ち上がり、地面をドンと突くのだという。「亀の子づき」という文字を画面に出しただけで、多くの高齢者が女性も男性も反応した。亀の子つき歌の文句を画像に出した際には、その内の何人もが、小声ではあるが、その場で歌い始めたのである。

町史の記述をただ紹介しただけで、会場はなにやら活気づいてきた。さらに「子供の遊び」の部分<sup>(38)</sup>を画像化したものを投影した（図2）。



図2 「子供の遊び」のプレゼンテーション画面

この画像でのアニメーションは、ほんの少しであるが、もうひと工夫加えた。先ず写真をフェードインさせて、その写真が何か問いかける。そして、それで遊んだか問いかける。その後、事象名（ここでは「花つなぎ」「木の芽つなぎ」「ゼンマイ綿のマリ作り」「カジカの種起こし」「胡桃刀」）をフェードインさせた。そのうえでどのような遊びだったかの問いを発し、応えを待ってから、それぞれの内容を表示するようにした。

この手順と問いかけへの応え、そしてその後に展開される住民の間の会話を簡単に整理したものが図3である。



図3 郷土史誌類情報を用いたワークショップの手順例

このオキナグサ（オバ）を使った遊びにおいては、世代によって住民の記憶が異なっていた。60才以上の方々は「オバの毛の髪結い」も「オバの毛のマリ作り」も、双方を記憶されていたが、それ以下のより若い方々は「マリ作り」しか経験が無かった。そこで一時、この講演は筆者の手を離れ、聴衆である生活者同士の会話となったのである。「今度教えて上げる」というような実践の契機になるような発言もみられた。

また、図2右下にある「カジカの種起こし」とは、川遊びの中でカジカという魚が産み付けた卵を見つけると、2週間ほど放置して、卵が成長するのを待ち、大きくなった卵を採取して醤油漬けにして食べるというものである。『岩泉郷土史』の記述では、なかなかその内容がつかめなかったが、この時の住民の会話の中から内容が明らかとなった。そのやりとりの中で、昔は沢山いたカジカが昭和50年頃から姿を消し、全く見られなくなってしまったが、ごく最近川に段々カジカが増えてきたという。もう80才近い高齢女性の言である。その方は、これだけカジカが戻ってくれば、また「種起こし」もできるだろうから、事前に連絡して夏に来てもらえればカジカの卵をご馳走しましょう。それはそれは美味しかったのだから、と言ってくださった。

地域の生活者、特に高齢の方は、今も地域の環境をしっかりと見据え、その変化を把握している。環境利用に関する卓越した知恵や技能が、その主体の内部にきちんと経験を通じて蓄積されているがゆえに、そうした変化にも気がつかれるのだろう。その地域固有の洞察力に基づく環境への評価と、その環境を資源化して利活用する知恵や技能が、地域に暮らす様々な生活者主体から提起され、議論され、共有されれば、必ずや地域振興という困難な課題の解決に繋がるだろう。そうしたワークショップこそ理想のワークショップである。

今回の試みでは、聴衆である住民とのやりとりの中で、様々な「記憶」が語られた。その「記憶」には、その地域特有の知恵や技能が含まれている。さらに現在の環境変化についても語られ、かつての経験に基づいた活動を再現しようという提起にまで繋がった。それらはまた、住民同士の会話の中でも繰り返され、その場に集まった多くの住民に共有されていたように思う。こうした活動を、もう少し続けられれば、農村における様々な問題に対し、客体・被害者として位置付く「地域住民」は、行政や様々な施策・事業を自律的に利用しながら、問題を雄々しく解決しようとする「地域生活者」として立ち現れるのではないかと思う。少なくともその端緒くらいにはなるだろう。そう感じるほどの熱気を、筆者がそれまで実践し、見聞してきた従来のワークショップには決して見られないほどの熱気を、今回の試みでは感じ取ることができた。それが出来たのは民俗学者たちが書き残した郷土史誌類があったからこそである。

## おわりに

本稿を執筆した動機は、近隣学問による民俗学批判があまりに一方的であると感じたことと、民俗学内部でも見られる批判的論調に、大きな疑問を感じたからである。

あたかも「全ては構築されたものであって、民俗学もその構築に荷担した。私たちはそれに対し反省している。いま行政で行われていることは、危険な構築なのであって、研究者であるから反省している私どもは、その行政を高みに立って糺さなければならない」というような論調は、現実の問題を何とか解決しようともがいている様々な主体から、もはや相手にされないほどの高みに立った視座にある。

また、高みに立ってはいるようだが、誰かが人為的に作ったのだろう支配的な「構造」（農村においては「農村近代化論」や「限界集落論」）に対抗するわけでもない。対抗する戦略・技術として打ち立てたものを「本質主義」や「資源化」だと非難するばかりである。支配的な「構造」に対する別な対抗戦略を提起するならともかく、「構造」そのものへの言及すらほとんどない。

おそらくそうした論調に付き合う実践者は皆無であろうと思う。一見盛んに見えるこの議論に、筆者以外の反対意見がほとんど出てきていないのがその証左である。いわば、こうした高みに立つ視座をもってしまうと、現代という時代と切り結ぶプレーヤーにはなりえないのである。

本稿ではことさら「資源化」という言葉を用いてきた。しかし、「資源化」の意味をはっきりと確定しているわけではない。批判の対象となる「資源化」は、行政や学問（ここでは民俗学）といったある種の権威が、地域の様々な自発的事象を「ナショナル」等の大きな権威に統合するもののようイメージされている。しかし、農村における「文化」や「ふるさと」の資源化はそういったものばかりでは無いし、一見そう見える「資源化」であっても、その過程には様々な主体の意思や動向がある。本稿では三つの事例から、「資源化の新たな展開」を提起した。しかし、実はそう真新しい提起ではないかも知れない。むしろ「資源化」に至る過程をつぶさに見聞し、自らその過程に参加しようとした経験を元に、「資源化」の意味を問い直したものである。

ここで取り上げた各地の「資源化」は、農村の過疎高齢化に伴う現実的な問題の解決を目的としている。農村環境が管理されたり、観光客が多く訪れたり、目に見える成果を挙げているが、

最も大きな成果は、地域の生活者が様々に展開される関係性の中から、地域で生きるための一種の「構造」を形成したことにあるように思う。そうした小さな「構造」<sup>(39)</sup>があって、はじめて「過疎・高齢化論」や「限界集落論」などという「ナショナル」な「構造」に対抗しうる自律的な生活者が再生産される。また、最後の岩泉町の事例は、民俗学の成果を用いて、意図的に小さな「構造」を構築する試みを紹介した。いわば民俗学が提起できる具体的な方法論提示の試みである。中途半端なものではあるが、確かな手応えを感じることが出来た。その場に同席してくださった研究者の方々も同じような感覚をもたれたことと信じている。<sup>(40)</sup>

ここで取り上げた事例地区に限らず農村地域に生活する高齢者の環境認知力とその利用に関する知恵や技能、そしてそれらを総合した洞察力には瞠目すべきものがある。老いを卑しむ時代状況のせいか、農村地域においてさえ高齢者の力は潜在してしまっているが、より多くの高齢者の社会参加が実現すれば、可能性は大きく広がるだろう。大代でも松代でも、今次の岩泉でも、高齢者の積極的発言が現実を有意に変化させている。そう考えると「過疎・高齢化」問題などというが、筆者のように何も知らず（知恵）、何も出来ず（技能）、何も見通せない（洞察）ような若い世代が少なくなってきたからと言って、何が問題なのだろうか、と考えてしまう。

安室知は次のように言う。

「過疎・高齢化を日本の農業の弱点、さらに民俗学においては伝承母体の消滅と捉え、はじめからマイナスイメージに押し込めてしまうことは誤りである。老によって担われ、だからこそ意味を持つ農もある。そうした意味から、農と老とはけっして矛盾するものではないし、農は老と親和的でさえあると考えられる」<sup>(42)</sup>。

この指摘は極めて重要である。もっと突き詰めて検討し整理すれば、民俗学は、高齢化率に基礎を置く「限界集落論」という大きな「構造」に対抗しうる、新しい大きな「構造」を構築できるかも知れない。大きいとはいえ、その新しき「構造」は、それぞれの地域に暮らす生活者の営為によって構築される小さな「構造」の重奏でなければならない。それこそが、民俗学が構築すべき「構造」であり、権威をもたない尊厳を高めるための「構造」なのである。

## 註

(1)——現代民俗学会第一回研究会「民俗学の危機－現代民俗学が問うべきもの」2008年9月20日 於お茶の水大学。

(2)——[中西 2007]。

(3)——同上 244 頁。

(4)——[坪井 1982] 159 頁。

(5)——例えば[磯岡 1990]。この磯岡の成果は、成城大学民俗学研究所が実施した柳田国男の山村調査の追跡調査がベースとなり、詳細な文化変化様態の把握から始まっている。この他にも、その前提となっている一連の報告書を参照されたい。[成城大学民俗学研究所 1986・1987・1988]。筆者も本研究報告の成果を活用させていただき、農村伝承文化の様態を検討した（[山下 2008-2]

103-108 頁）。

(6)——[中西 2007] 230 頁。

(7)——[トマス・クーン 1971]。「通常科学」の記述に関しては、[小田中 2004] (185-188 頁) に負うところが大きい。

(8)——この見地については[内田 2002] (20-21 頁) に負っている。新書ばかり引用して申し訳ないが、本書は新書の意義についてもわかりやすく提示しており、興味深い (7-9 頁)。

(9)——[山下 2008] 29 頁。

(10)——[福田 1988] 70 頁。

(11)——人間主義的進歩史観とは、「歴史の流れを「今・ここ・自分」に向けて一直線に「進化」してきた過程と



して捉えたがる傾向」に対し、ミシェル・フーコーが批判するために用いた言葉である〔内田 2002〕。ヘーゲルの歴史主義、リストやマルクスの発展段階論、ロストウのテイクオフ論等々の学論（歴史学における「大きな物語」）もこれに相当すると思われるが、学問以外の一般歴史観にも適用される。

(12)——この件に関しては、〔山下 2008-1〕（7-52 頁）を参照。

(13)——〔中西 2007〕233 頁。

(14)——同上 230 頁。

(15)——近年の「限界集落論」の提唱者は農村社会学者の大野晃である〔大野 2005〕。大野自身は、高知県の山村をつぶさに歩き感得した事実を、深刻な問題として生活者・行政・研究者に意識させ、皆でしっかり議論していこうと提唱した。しかし、概念の根幹が、単純きわまる地域類型であったため、「65 才以上の住民が全体の半分を超えたらもう限界で、後は消滅するだけ」という諦念に満ちた運命論に堕してしまった。残念なことに、誰でも議論に参画出来るようにとした心遣いが仇になったといえるだろう。議論がほとんど行われることがないまま、限界集落論は農村の未来を規定する桎梏構造になっている。

(16)——〔福武 1949〕。また福武の地域類型の動態的意味については〔藤田 1981〕161 頁を参照。

(17)——〔大野 2008〕より。

(18)——〔早川 1938〕37 頁。

(19)——〔山口 1974〕。また、高距限界の議論に関しては〔藤田 1981〕（55-59 頁）に整理されている。また、この「高距限界集落」についての考察は、大阪教育大学の今里悟之准教授の示唆を端緒としている。心より感謝申し上げる。

(20)——〔山口 1974〕3 頁。

(21)——〔内田 2002〕110-111 頁。

(22)——農学社系研究による「科学的」「客観的」研究の多くが、「役に立つ」ということを前提としながら、「役に立っている」ようには見えない。その具体的な様相に関しては拙著〔山下 2008-1〕（64-70 頁、137-142 頁）を参照いただきたい。

(23)——本論においては「構造」という言葉に複数の意味を持たせている。文中、限界集落論等を指しながら「支配的な構造」とか「大きな構造」とする際には「支配する者は語り、語ることによって支配し、支配される者は沈黙を余儀なくさせられ、言葉を奪われることによって支配される。」〔桑田 1997〕164-165 頁）という権力・

権威によって不断に生成される「構造」を意味する。そうした「構造」に対峙し、反駁する小さな「構造」という場合には、歴史認識の根本にあるべきとされる「感性的創造作用」の成果としての構造を指す。「感性的創造作用」はまた「思い出という体験の沸騰」（〔水野 1998〕14 頁）とも表現される。それは、「もし全体が単なる全体として、そのうちに外面的なものと内面的なものとの構造をもたないのであるならば、そこには何らかの他の直感があるにしても、特に理解の過程と名付けられるべきものは存在のしようもないであろう。しかるに理解はこの構造の外部にあることが出来ないから、却って理解そのものがその発展の過程に於て内からこの構造を形成していくものとして明らかにされる必要がある」（〔三木 1929〕183-184 頁）とあるように、主体が卑近な歴史を認識・理解する際の作用もしくは技術であり、前者権力的な「構造」に対抗する「構造」を形成する。ともに歴史学に帰属する概念であり、民俗学における構造概念とは少々ずれるだろうが、お含みおきいただきたい。

(24)——〔小松 2002〕247 頁。

(25)——〔山下 2008-1〕245-291 頁。

(26)——〔山下 2008-2〕。

(27)——〔北川他 2007〕3 頁。

(28)——同上 10-13 頁より。

(29)——「農舞台」マネージャー関口正洋氏に転写していただいた。心より感謝を申し上げる。

(30)——福島氏は 2006 年をもってこの棚田の耕作をやめたが、その後現在まで「農舞台」のスタッフと、地域生活者の有志が協働してこの棚田を維持している。

(31)——〔北川他 2007〕4 頁。

(32)——〔小林 1995〕。

(33)——まづだい農舞台では、棚田の維持保全を目途とした体験型農業や、集落の活性化に向けた都市農村交流事業、環境学習事業にも積極的に取り組んでいる。さらに、越後妻有地域の農村活性化を目途として、地域生活者とともに、NPO 法人を立ち上げたり、全国の「限界集落」を元気づけるためのユニークな事業や積極的な情報発信を計画しており、一層の農村貢献を志している。

(34)——〔松代町史編纂委員会 1989〕、〔東洋大学民俗研究会 1985〕。

(35)——ワークショップ手法については〔藤本 1994〕、〔門間 2001〕等を参照。

(36)——この講演会の様子、また筆者の試みの詳細については〔星野 2008〕に整理されている。是非ご参照い

- ただきたい。
- (37)——[関口1980] 上巻 530-531頁, 547-549頁。
- (38)——同上, 下巻 553-564頁。
- (39)——前注(23)を参照いただきたい。この場合の「構造」とは、思い出や記憶にリンクした現在進行形の体験を沸騰させた「感性的創造作用」により形成されたものであると言えるのではなからうか。
- (40)——この岩泉で試みたことをワークショップ手法として整理し、筆者が奉職していた(独)農業・食品産業技術研究機構 農村工学研究所(元農林水産省農業工学研究所)へ、筆者の担当研究課題の主要成果として提出したところ、中期計画(本機構5ヶ年の研究計画にあたる)の中項目にあたる中課題を代表する成果に選定された。行政研究方面において高い評価を得た試みとなった。
- (41)——大代町では八反田川の管理活動を通じて、高齢者や子供たち等々の多様な世代の社会参加が自然に促されつつある。[山下2008-1](274-287頁)を参照いただきたい。
- (42)——[安室2009] 278頁。

## 参考文献

- 磯岡哲也 1990 「アカルチュレーション理論からみた山村の文化変化」成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版 239-266頁
- 内田樹 2002 『寝ながら学べる構造主義』(文春新書) 文藝春秋
- 大野晃 2005 『山村環境社会学序説 現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会
- 大野晃 2008 「新・田舎人インタビュー 農山漁村の危機!『限界集落』への対応と地域再生 大野晃さん(長野大学教授)」『季刊 新田舎人』第55号 ふるさと保全ネットワーク 3-7頁
- 桑田禮彰 1997 『フーコーの系譜学 フランス哲学〈覇権〉の変遷』(講談社選書メチエ101) 講談社
- 小田中直樹 2004 『歴史学って何だ?』(PHP新書286) PHP研究所
- 北川フラム・大地の芸術祭実行委員会 2007 『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006』現代企画室
- 小林康正 1995 『伝承の解剖学』『身体構築学 社会的学習過程としての身体技法』未発選書第2巻 ひつじ書房 207-260頁
- 小松和彦 2002 「桜と民俗学」『神なき時代の民俗学』せりか書房 241-249頁
- 成城大学民俗学研究所 1986 『山村生活50年 その文化変化の研究 昭和59年度調査報告』民俗学研究所紀要 第10集 成城大学民俗学研究所
- 成城大学民俗学研究所 1987 『山村生活50年 その文化変化の研究 昭和60年度調査報告』成城大学民俗学研究所
- 成城大学民俗学研究所 1988 『山村生活50年 その文化変化の研究 昭和61年度調査報告』成城大学民俗学研究所
- 関口喜多路 1980 『岩泉地方史』上下巻 岩泉町教育委員会
- 坪井洋文 1982 『稲を選んだ日本人 民俗的思考の世界』未来社
- 東洋大学民俗研究会 1985 『奴奈川の民俗-新潟県東頸城郡松代町奴奈川地区』東洋大学民俗研究会
- トマス・クーン著 中山茂訳 1971 『科学革命の構造』みすず書房
- 中西裕二 2007 「複数の民俗論, そして複数の日本論へ」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館 229-252頁
- 早川孝太郎 1938 「農村の慰安・娯楽問題」『村 農村更生時報』昭和13年12月号 農村更生協会 32-40頁
- 福田敏一 1988 『国家・民族・権力 -現代における自由を求めて-』岩波書店
- 福武直 1949 『日本農村の社会的性格』東京大学出版会
- 藤田佳久 1981 『日本の山村』地人書房
- 藤本信義 1994 「村づくりワークショップのすすめ 参加型の快適農村デザイン手法」『農村工学研究』(財)農村開発企画委員会
- 星野次汪 2008 『07フォーラム膝詰め談義「伝え承ける岩泉の暮らしと文化」』(FSCブックレット6) 岩手大学農学部付属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター
- 松代町史編集委員会編 1989 『松代町史』松代町
- 三木清 1929 「史的観念論の諸問題」『三木清著作集 第二巻』(1949) 岩波書店
- 水野建雄 1988 『ディルタイの歴史認識とヘーゲル』南窓社
- 門間敏幸 2001 『TN法 住民参加の地域づくり』家の光協会
- 安室知 2009 「農のある暮らし」同編『日本の民俗4 食と農』吉川弘文館 212-288頁

- 
- 山口源吾 1974 『高距限界集落』 大明堂
- 山下惣一 2008 「「村は大ゆれ」から30年」『2008年現代農業11月増刊「限界集落」なんて呼ばせない 集落支援ハンドブック』 農山漁村文化協会 28-33頁
- 山下裕作 2008-1 『実践の民俗学 - 現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」』 農山漁村文化協会
- 山下裕作 2008-2 「言葉を発し、紡ぎ上げ、「大丈夫。きっとなんとかなる」と言おう」『2008年現代農業11月増刊「限界集落」なんて呼ばせない 集落支援ハンドブック』 農山漁村文化協会 96-101頁

(農村工学研究所, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2009年9月24日受理, 2010年5月25日審査終了)

## **New Development of Hometown Recycling**

YAMASHITA Yusaku

“Capitalization of the culture” and “Capitalization of the hometown” are actively discussed in folklore now. The criticism to learning that a critical discussion to a regional promotion business and a cultural business of an administrative initiation chiefly occupies the main current, and “Essence principle” side of folklore contributed to the business measure of such the administration is developed there. However, these discussions seem to be done while turned one’s eyes away from the familiar, serious problem that the dweller in the region has. This text takes up the problem of “Marginal village” as a big problem that the farming village is faced, and analyzes the practice of the site where the solution is attempted while making the best use of a folk culture finding from two cases with Shimane Prefecture Oda City Oshiro-town and the Niigata Prefecture Tokamachi City Matsudai-town. It is an attempt that starts asking the new meaning while seeing the process of the capitalization while the discussion about the past has stayed in the criticism to the capitalization of government manufacture. Moreover, I attempt the construction of the methodology of a sound capitalization to be able to institute folklore, and introduce the settlement of the attempt to practice on the site in the Iwate Prefecture Shimohei District Iwaizumi-town. These are great problems and the halfway examinations that are not brought up from a region on the way for the examination, however I hope if coming to create a stir in the current discussion about a one-sided “Capitalization” criticism a little.

Key words: Paddy field, hometown, recycling, marginal village, folklore